

[目次]

日本生態学会第54回大会案内	1
日本生態学会誌編集委員長公募のお知らせ	6
記 事	
I. 53回大会総会、全国委員会、各種委員会報告承認決議事項	7
A. 報告事項	
B. 承認事項	
C. 決議事項	
II. 日本生態学会53回大会記録	22
III. The Second Scientific Congress of EAFES の報告	25
IV. 書評依頼図書	26
V. 寄贈図書	26
VI. 後援・協賛	26
お知らせ	
1. 公募	26
書 評	27
追 悼	28
日本生態学会役員一覧	29
京都大学生態学研究センターニュース	33

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

会費滞納2年で会誌の発送停止となり、3年で退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research + 生態誌 *	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

*Ecological Research および生態誌については2007年度より冊子を必要としない会員への割引を開始いたします。

**Ecological Research への投稿権利は会員に限定しません。

地区会費（正・学生会員のみ）

北海道地区：200円 東北地区：800円 関東地区：600円 中部地区：0円
近畿地区：400円 中国・四国地区：400円 九州地区：700円

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

Tel&Fax 075-384-0250 E-mail kaiin@mail.esj.ne.jp

日本生態学会第 54 回大会案内

日本生態学会第 54 回大会（公式略称 ESJ54）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。

連絡先

〒 790-8577 松山市文京町 2-5 愛媛大学沿岸環境科学研究センター内
日本生態学会第 54 回大会（ESJ54）実行委員会
TEL: 089-927-9643 FAX: 089-927-9630
担当：柳沢康信（大会会長）、大森浩二（大会実行委員長）
電子メール taikai@mail.esj.ne.jp
大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/54/>

本大会に関する問い合わせは、できるだけ大会公式ホームページにある問い合わせページからお願いします。ただし宿泊関係は「宿泊案内」の項の担当業者に直接ご連絡ください。

大会の概要

本大会では、シンポジウム（企画・公募）、フォーラム、一般講演（口頭・ポスター）、自由集会、総会、受賞講演会、懇親会を行います。公募シンポジウム、自由集会、一般講演については会員からの提案及び講演申し込みを受け付けます。

本大会は、参加申し込みをしていただけば、日本生態学会員ではない方も参加できます。ただし、講演及びシンポジウム等の企画提案をするには、日本生態学会員になっていただく必要があります。

日本生態学会に入会するには、<http://www.esj.ne.jp/esj/>にある入会案内をご覧くださいか、または

〒 606-8148 京都市北区小山西花池町 1-8
日本生態学会事務局
TEL & Fax: 075-384-0250
E-mail: kaiin@mail.esj.ne.jp

までお問い合わせください。

大会プログラムは、2007 年 2 月頃に日本生態学会員全員に郵送されることになっています。ただし、会費未納の場合はその限りではありませんので、プログラムの郵送を希望される会員は、必ず年内に会費を納入してください。

非会員には、事前に参加申し込みをしても、大会プログラムは郵送されません。2007 年 2 月頃に大会公式ホームページで公開予定のウェブ版のプログラムと当日会場でお渡しする講演要旨集をご利用ください。

会場・日程

本大会の会場と日程は下記の通りです。

松山市文京町 1-3 愛媛大学共通教育棟、グリーンホール、法文学部講義棟、総合情報メディアセンター
ただし、懇親会と公開講演会は、愛媛県民文化会館真珠の間で行われます。

2007 年

- 3 月 19 日（月）各種委員会、自由集会
- 3 月 20 日（火）シンポ、一般講演（口頭・ポスター）、自由集会
- 3 月 21 日（水）シンポ、一般講演（ポスター）、総会、受賞講演、懇親会

3月22日(木) シンポ、一般講演(口頭・ポスター)、自由集会

3月23日(金) 公開講演会(09:30-12:30)

講演申込み等の締め切り

大会参加、公募シンポジウム、一般講演、自由集会の申し込みは、大会公式ホームページで行ってください。シンポジウムの申し込みは2006年9月11日(月)から、大会参加、一般講演、自由集会の申し込みは2006年10月2日(月)から受付を開始する予定です。

講演要旨の登録は、大会公式ホームページで2006年12月18日(月)から受け付ける予定です。

シンポジウム申し込み締め切り	2006年10月6日(金)	17:00
一般講演申し込み締め切り	2006年11月17日(金)	17:00
自由集会申し込み締め切り	2006年11月17日(金)	17:00
講演要旨登録締め切り	2007年1月9日(火)	17:00

諸経費と送金方法

大会参加費 2006年11月17日(金)まで 一般6,500円、学生4,000円
2006年11月18日(土)以降 一般7,500円、学生5,000円
非会員(学生は除く)は納入時期を問わず7,500円
講演要旨集のみ 3000円(大会終了後に郵送します)

懇親会費 2006年11月17日(金)まで 一般6,000円、学生4,000円
2006年11月18日(土)以降 一般7,000円、学生5,000円
非会員(学生は除く)は納入時期を問わず7,000円

以上の経費は、ニュースレターに綴じ込みの郵便振替払込用紙を使って郵便局から振り込んでください。その際、オンライン申し込み時に発行される登録番号を必ず記入してください。郵便局が発行する払込受領証を必ず保管しておいてください。**一枚の払込用紙を複数人で使用しないでください。**専用の郵便振替払込用紙がない場合は、郵便局に備え付けの払込用紙をお使いください。その場合、通信欄にオンライン申し込み時の登録番号、振り込みの内訳と、氏名・所属・連絡先を明記してください。

郵便局の振替口座番号：01630-6-130333

口座名称：日本生態学会第54回大会実行委員会

2007年3月9日(金)以降にお振り込みの場合は、念のため、払い込みを証明する払込受領証を会場受付でお示しください。

一旦納入された参加費と懇親会費はお返ししません。大会を欠席された方には要旨集を郵送します。

一般講演の申込み方法

一般講演を希望する場合は、登壇者(ポスター発表の場合は主たる説明者)が大会参加申し込みとあわせて講演のタイトルと著者名、所属を登録してください。締め切りは11月17日(金)17:00です。講演登録時に、口頭発表かポスター発表かを選んでください。ただし、会場の都合でご希望に添えない場合もあります。

口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。ただし、英語での発表の申し込み数によっては、分野にこだわらずに英語での発表を集めたセッションに回っていただく場合があります。

若手の優秀なポスター発表にはポスター賞を授与します。詳細は、ポスター賞の項を参照してください。

発表内容に応じて会場・時間の割り振りやポスター賞のグループ分けを行うため、発表申し込み時に適切な

分野を以下のうちから3つまで選んで下さい。

- | | | |
|-----------|-----------|------------|
| 1. 群落 | 2. 植物個体群 | 3. 植物生理生態 |
| 4. 植物繁殖 | 5. 植物生活史 | 6. 送粉 |
| 7. 種子散布 | 8. 菌類 | 9. 微生物 |
| 10. 景観生態 | 11. 遷移・更新 | 12. フェノロジー |
| 13. 進化 | 14. 種多様性 | 15. 数理 |
| 16. 動物群集 | 17. 動物繁殖 | 18. 動物個体群 |
| 19. 動物生活史 | 20. 行動 | 21. 社会生態 |
| 22. 分子 | 23. 古生態 | 24. 保全 |
| 25. 生態系管理 | 26. 外来種 | 27. 都市 |
| 28. 物質生産 | 29. 物質循環 | 30. その他 |

一般講演の演者（登壇者及び主たる説明者）は、日本生態学会 A 会員と B 会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。また、一人で二つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。さらに、公募シンポジウムの企画者・講演者は一般講演を行えません（口頭・ポスターとも）。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承ください。

学会費滞納者、大会参加費未納者は発表できません。早めの払い込みをお願いします。

口頭発表の方法

一般講演の口頭発表は、全て会場備えつけのパソコン（OSはWindows XP）と液晶プロジェクター（解像度1024×768）を使用したマイクロソフト・パワーポイント（Windows版PowerPoint 2003以降）あるいはPDFによる発表とします。持ち込みのコンピューターは使用できません。

発表用ファイルは大会公式ホームページで登録してください。登録開始と締め切りの時期については講演申し込み開始時までに大会公式ホームページでお知らせします。事前のウイルスチェック、映写試験などのため、早めの締め切りとなりますが、ご協力をお願いします。ファイルの形式やファイル名などの詳細は、登録ページで事前にご確認ください。

ポスター発表の方法

ポスターボードは縦長の90cm×210cmのものを使用する予定です。

ポスター賞

日本生態学会は、若手研究者を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター賞の対象は発表者が若手でポスター賞に応募した発表に限ります。ポスター賞は「若手研究者を奨励するため」であることをご理解のうえご応募ください。ポスター賞の運営、審査は新潟大会に準じて行う予定です。詳細は大会プログラムに掲載しますので、ポスターを準備するときに参考にしてください。

講演要旨

講演要旨は、大会公式ホームページで登録してください。2006年12月18日（月）から受付ける予定です。締め切りは2007年1月9日（火）17:00の予定です。長さはタイトルと著者名を含めて日本語の場合800字以内、英語の場合は200語以内です。詳細は大会公式ホームページでご確認ください。

公募シンポジウム

シンポジウムを公募します。2006年9月11日（月）から受付を開始する予定です。開催を希望される方は、2006年10月6日（金）までに大会公式ホームページからお申し込みください。申し込みに必要な事項は大会公式ホームページに掲載します。

場所と時間の制約がある中で、多数の生態学会員にとって有益なシンポジウムを行うため、提案されたシンポジウムについて大会企画委員会による採否の審査を行います。審査は、「内容に十分な一般性・普遍性が認められるか」、「当該テーマの到達点や問題点の整理に十分寄与するか」、「研究発展の方向性について活発な討論が期待されるか」等を判断基準にして行われます。企画の変更や内容が重複しているシンポジウムの統合をお願いする場合があります。**審査の結果は11月3日（金）までにメールで連絡します。**公募シンポジウムとして採択されなかったものを改めて自由集会として提案していただいてもかまいません。

シンポジウムの時間枠は3時間の予定です。

使用できる投影機材は液晶プロジェクターだけです。発表の方法は一般講演の「**口頭発表の方法**」に準じますが、詳細は開催の可否と同時にお知らせします。

注意：

1. 公募シンポジウムでの企画者と講演者は一般講演で口頭発表・ポスター発表をすることはできません。
2. 複数の公募シンポジウムの企画者、講演者となることはできません。
3. コメンテータの掛け持ちは極力避けてください。重複した時間に当たった場合でもプログラムの調整は行いません。
4. 公募シンポジウムの企画者と講演者は原則として日本生態学会 A 会員と B 会員に限ります。講演者に C 会員または非会員を含む場合は、その必要性を説明してください。C 会員及び非会員の講演を認めるかどうかは大会企画委員会が判断します。

企画シンポジウム

大会企画委員会が企画を依頼するシンポジウムを1～2件開催する予定です。企画の内容は大会公式ホームページに掲載します。

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを1～2件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会等が取り組んでいる生態学に関連する課題について、広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、重複講演制限の対象となりません。

自由集会

自由集会の提案を受け付けます。自由集会には、3月19日（月）、20日（火）、22日（木）の夜の各2時間を充てる予定です。2006年10月2日（月）から受付を開始する予定です。開催を希望される方は、2006年11月17日（金）17:00までに大会公式ホームページからお申し込みください。申し込みに必要な事項は大会公式ホームページに掲載します。

自由集会の企画者はC会員を含む日本生態学会会員に限りますが、講演者には非会員の方を含んでもかまいません。

提案された自由集会の数が予定数を上まわる場合は、まず、公募シンポジウムに採択された企画者による提案にご遠慮いただきます。それでも数が多い場合には、抽選によって採否を決定します。開催の可否については、12月8日（金）までにメールでご連絡します。

自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。

自由集会で使用可能な機材は液晶プロジェクターのみです。発表の方法は一般講演の「**口頭発表の方法**」に準じますが、詳細は開催の可否と同時にお知らせします。

懇親会

2007年3月21日（水）午後6時から、愛媛県民文化会館 真珠の間（電話 089-923-5111）にて懇親会を行います。懇親会会場は、道後温泉の西側に位置し、大会会場から道後温泉（東）方向に徒歩10分のところにあります。なお懇親会の申し込みは先着800名で締め切ります。

託児所

これまでの大会と同様、大会会場内に託児室を設置する予定です。申し込み方法、料金等は大会公式ホームページでお知らせします。

エコカップ 2007

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ 2007 が行われます。主催はエコカップ 2007 実行委員会です。詳細は追って大会公式ホームページでお知らせします。

宿泊案内

学会参加の皆様のご宿泊等につきましては、フジトラベルサービス・トムズ重信営業所に斡旋を依頼しております。

申し込み・問い合わせ先

フジトラベルサービス・トムズ重信営業所

〒791-0216 東温市野田3丁目 1-13

TEL: 089-964-4151 FAX: 089-964-4154

e-mail : toon@fj-t.com

<http://www.fj-t.com/>

第10回公開講演会

第10回公開講演会（公開講演会実行委員会企画）を、以下の内容で行います。

日時：2007年3月23日（金）午前9時30分から12時

会場：愛媛県民文化会館 真珠の間

テーマ：「地球生態系の現在と未来—21世紀 COE 4拠点リーダーが語る—」

日本生態学会誌編集委員長の募集

日本生態学会は下記の要領で日本生態学会誌の次期編集委員長を募集いたしますので、奮ってご応募ください。
自推・他推のいずれも受け付けます。

募集人員 日本生態学会編集委員長 1名

任期 2008年1月1日～2010年12月31日

業務内容

日本生態学会誌の編集を行う。(なお、日本生態学会事務局には日本生態学会誌の編集担当の事務職員が1名勤務しています。)

応募資格

日本生態学会正会員(但し、団体会員、賛助会員、名誉会員は除く。)

提出書類

- (1) 会長宛の応募文
- (2) 履歴書
- (3) 編集方針(2000字程度)
- (4) 編集体制の概要(2000字程度)
- (5) 他推の場合は推薦書1通(本人の承諾を得ておくこと。編集方針と編集体制の概要も本人と相談の上作成すること。)

応募期間 2006年7月20日～2006年10月31日

選考方法 書類審査(場合によっては面接をお願いすることがある)

応募書類送付先および問い合わせ先

日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

TEL・FAX 075-384-0250

E-mail office@mail.esj.ne.jp

記 事

I. 日本生態学会大会総会（2006年3月26日、参加者約100名）および全国委員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 庶務報告（2005年4月～2006年2月）

1. 文部科学省より第9回公開講演会（新潟）へ平成17年度科研費（研究成果公開発表）の内定通知があった（1,360,000円）（4月1日）
2. 環境省・厚生労働省・農林水産省へ「フェンチオンの使用回避についての要望書」を送付した。（4月6日）
3. 日本学術振興会より平成17年度科研費（出版助成金）の決定通知があった（8,600,000円）（4月15日）
4. 生態系管理委員の任期延長について全国委員に諮り承認された。（4月25日）
5. 土倉事務所と2005年事務契約書を交わした。（4月25日）
6. 大学評価・学位授与機構へ10名の評価委員候補者を推薦した。（4月27日）
7. 林野庁・北海道庁・緑資源機構へ「様似・えりも道路中止」要望書を送付した（5月10日）
8. 国土交通省へ「特殊地下壕について」の要望書を送付した。（5月18日）
9. 生態学関連3学会連絡協議会の設置について全国委員に諮り承認された。（5月27日）
10. 将来計画委員会の任期延長及び新委員の追加について全国委員に諮り承認された。（6月14日）
11. 京都事務部を開設した。（7月1日）
12. Ecological Research 編集委員の交代が全国委員によって承認された。（7月26日）
13. 学会賞選考委員に新任として粕谷・工藤・東全国委員が選出された。（8月31日）
14. 選挙管理委員に梅原氏・草加氏・寺島氏・徳地氏・西野氏・前迫氏が全国委員によって承認された。（9月15日）
15. Ecological Research 編集委員の追加が全国委員によって承認された。（10月4日）
16. 次々期会長選挙及び次期全国委員選挙の開票を行った。（10月25日）
17. 学会賞選考委員選考の学会賞・宮地賞候補者が全国委員によって承認された。（11月11日）
18. 生態学会誌の超過頁について全国委員により承認された。（次年度以降の増ページについては審議続行）（11月25日）
19. 第13期全国委員として選出された酒井章子氏の辞退が全国委員会によって承認された。（12月15日）
20. 生態誌・保全誌投稿規定が全国委員会によって承認された。（1月16日）
21. 「学会誌を紙媒体として配布を受けない会員の会費

について」の提案が全国委員会によって承認された。（1月19日）

22. 東正剛氏に第4回日本生態学会功労賞を贈ることが全国委員会によって承認された。（1月19日）
23. 新会計監事として徳地直子氏（京都大）が全国委員会に承認された。（1月25日）
24. 大会企画委員の増員が全国委員会に承認された。（1月31日）
25. 国際対応委員会の新委員長候補中静透氏が全国委員に承認された。（2月10日）
 - * シンポジウム・ワークショップなどの協賛・後援16件を許可した。
 - * 学会印刷物のホームページ・書籍への転載を4件許可した。

b. 2004年度学会誌発行状況、会員数、会費納入率

(1) 学会誌発行部数および配本内訳(2005年12月末現在)

日本生態学会誌55巻

	1号	2号	3号
発行部数	3800	3800	3750
配本部数	3758	3727	3710
残部数	42	73	40

Ecological Research Vol.20

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	3700	3700	3700	3700	3700	3700
配本部数	3689	3666	3657	3642	3633	3628
残部数	11	34	43	58	67	72

保全生態学研究10巻

	1号	2号
発行部数	1100	1150
配本部数	1100	1094
残部数	0	56

配本内訳

	日本生態学会誌		Ecological Research		保全生態学研究	
	55巻3号		Vol.20No.6		10巻2号	
	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数
一般会員	2668	68	2668	68	855	13
学生会員	724	55	724	55	155	1
団体	146	0	146	0	23	0
国外個人会員	33	0	33	0	3	0
国外団体会員	0	0	0	0	0	0
賛助	1	0	1	0	0	0
小計	3572	123	3572	123	1036	14
名誉会員	5	0	5	0	0	0
寄贈交換	56	0	51	0	54	0
購読	77	0	0	0	4	0
小計	138	0	56	0	58	0
合計	3710	123	3628	123	1094	14

(2) 会員数 (各年度 12 月末現在)

	2004年							2005年						
	一般A	B	C	学生A	B	C	合計	一般A	B	C	学生A	B	C	合計
北海道	235	57	20	85	8	1	406	224	65	19	75	14	3	400
東北	147	32	12	39	6	1	237	140	34	9	32	5	1	221
関東	713	225	86	196	44	10	1274	705	245	84	196	53	9	1292
中部	285	93	24	83	6	5	496	278	117	26	85	14	5	525
近畿	325	109	27	147	14	9	631	317	125	25	154	19	10	650
中四国	175	43	11	59	10	4	288	172	49	9	61	11	2	291
九州	219	42	15	52	4	4	336	212	47	14	52	8	2	335
小計	2099	601	195	661	92	34	3682	2048	682	186	655	124	32	3727
団体				A144	B14	C7	165				A127	B17	C6	150
国外団体							0							0
国外一般							29							33
同上国内扱い							0							0
賛助							1							1
名誉							5							5
小計							200							189
合計							3882							3916

(3) 会費納入率 (各年 12 月末現在)

	2004年		2005年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	92.6	79.8	94.5	96.6
東北	91.6	76.1	98.9	97.4
関東	91.3	72.4	97.6	92.2
中部	90.8	77.7	96.4	92.3
近畿	90.2	81.2	98.3	95.6
中四国	87.8	61.6	93.5	90.5
九州	88.4	81.7	96.3	88.7
平均率	90.4	75.8	96.5	93.3

c. 会計報告 (2004 年 9 月～2005 年 2 月)

- 第 9 回宮地賞受賞者へ賞金 30 万円ずつを送金した。(4 月 7 日)
- 土倉事務所へ 2005 年第 1 回業務委託費として 1,000,000 円を支払った。(5 月 11 日)
- 第 53 回生態学会大会及び東アジア生態学会連合第 2 回大会補助金として 2,300,000 円を支払った。(5 月 16 日)
- 京都事務部敷金として 926,944 円を支払った。(6 月 16 日)
- 第 52 回大阪大会実行委員会より大会還元金 2,000,000 円の振込みがあった。(6 月 17 日)
- 文部科学省より科研費補助金 (公開講演会) 1,360,000 円が振り込まれた。(6 月 21 日)
- Blackwell 社より 2004 年度 ER 還元金 1,097,145 円が振り込まれた。(7 月 11 日)
- 学術振興会より科研費補助金 (学術定期刊行物) 8,600,000 円が振り込まれた。(7 月 15 日)
- 国際生物学オリンピック (IBO) 北京大会視察参加費として 531,594 円を支払った。(8 月 26 日・29 日)
- アライブネットへオプション追加費用として 115,500 円を支払った。(9 月 1 日)
- 特別会計 2 より事務局移転費として 3,518,790 円を

支払った。(9 月 21 日)

- 東京科学同人より生態学入門の印税として 125,244 円が振り込まれた。(9 月 22 日)
- 学術著作権協会より 87,606 円が振り込まれた。(10 月 28 日)
- 2005 年度の会計監査が土倉事務所で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。(2 月 9 日)
- 土倉事務所へ会員管理システム貸与年間費として 52,500 円を支払った。(2 月 10 日)
- (株) アライブネットへレンタルサーバ年間利用料として 418,000 円を支払った。(2 月 14 日)
- 自然保護専門委員会アフターケア委員へ 05 年度活動費として 295,780 円を支払った。(2 月 15 日)
- 定期預金の解約により 388,813 円の利子収入があった。(2 月 15 日)

2. 日本生態学会誌刊行協議会報告

日時：2006 年 3 月 24 日 13:30-15:30

場所：新潟朱鷺メッセ H 会場

(1) 生態誌事務局からの報告

投稿・掲載状況の報告。

ページ数に関する報告 (学会事務局から予算に関する補足)。

4 月号の内容の報告。

(2) 刊行内容の評価について

会員の意見を反映させるため、アンケートをとる (今後の参考のため)。

今後の編集のあり方について議論した。

(3) その他

ページ超過の取り扱いについて意見交換を行った。

ER との同時発送のため、12 月号を 11 月発送に変更することになった。

(文責：大串隆之)

3. Ecological Research 刊行協議会報告

日時：2006 年 3 月 24 日 13:00-15:00

議題

- 事務局報告 (投稿論文、掲載論文の内訳：国内外別/地域別/月別本数、審査状況の内訳：受理・却下率/結果内訳など)
- Ecological Research Award 2005 受賞論文について
 - * 審査手順
 - 1) 対象論文 80 編について、編集委員からの推薦を公募 (約 3 編ずつ)
 - 2) 編集幹事により候補論文 6 編の選出
 - 3) 編集委員による投票 (順位をつけて 3 編)
 - 4) 集計
 - 5) 刊行協議会への報告、常任委員会の承認
 - * 受賞論文 (全 4 編)
- 特集号について
 - 1) Forest ecosystems and environments by T. Kohyama (全 15 編 / Vol. 20 No. 3 掲載済み)
 - 2) Biodiversity by N. Yamamura (全 5 編 / Vol. 21 No.

- 1 掲載済み)
- 3) 京都賞 (Theoretical Ecology) by Y. Iwasa (全7編 / Vol. 21 No. 3 掲載予定)
 - 4) LTER by S-K Hong (全17編 / Vol. No.6 掲載予定)
 - 5) 空間統計学 by M. Tuda (全6編予定 / Vol. 21 No.1 掲載予定)
 - 6) Invasion and microevolution by T. Yoshida (全17編予定, Vol 21 掲載号未定)
- (4) Editorial Manager について (下記参照)
- (5) 超過ページ数を減らすための対策
- * インデックスの削除
 - * 投稿規定を HP に掲載。白紙ページの削除。
 - * 印刷ページ数の増加について (現在の年間 744 から年間 864 ページに) (下記参照)
 - * 編集委員によるページ数削減の指導
- (6) その他ページ数削減のための提案
- * 印刷の必要のない資料は related material としてウェブに掲載してもらう
 - * 追加料金の対象となるページ数の変更
 - * 論文の採択率を抑える

Ecological Research の編集方式変更について

Ecological Research の編集方式の変更について会員の皆様にご報告しておきたいと思っております。

Ecological Research は投稿数が急速に増えています。北大の編集事務局では年間 170 編といわれた投稿数が、現在年間 400 編を超えようとしています。そのためこれまでのやり方は対応の限界にきています。

そこで、Editorial Manager という学術雑誌の審査および編集のシステムの導入を昨年から検討をすすめてまいりました。

Editorial Manager は著者による原稿の投稿、編集委員による査読者の選択、査読者による査読結果投稿などすべてを雑誌のホームページを通じて行うものです。同様なシステムは、他の学術雑誌に導入されており、日本生態学会の会員でも何らかの形で使った経験がある人が増えています。そのため数年前とは違っていならばスムーズに導入できると思っています。

Editorial Manager では、投稿論文のそれぞれについて、過去の判断や査読結果、手紙などの履歴が、クリックするだけですべて取り出せるようになっていきます。また編集ステージのどの段階にあるかもすぐにわかります。そのため複数の編集補佐員や編集委員長の間で仕事を代わったり分担したりもできます。

また、様々な面で編集作業が軽減できます。編集委員長、編集委員、査読者などのそれぞれの作業の結果として必要なメールが流され、作業が進められます。そのためこれまですべて編集補佐員の手作業で行っていたメール作成、送付などが、ある程度自動化されます。

Editorial Manager を導入する準備をしてきました。論文を分類するための分野分け項目リストを作成したり (生態学事典の項目分類を使いました)、査読経験者のデータベースのための資料作成などの作業をすすめました。また Ecological Research 用に編集手順をカスタマイ

ズしました。そして夏には外国人を含む編集委員全員に使用ガイドによるトレーニングを行ないました。

9 月の新規投稿論文から、すべて Editorial Manager を用いて編集作業を行います。質問、改善点などお気づきの点がありましたら、遠慮なく直接、巖佐までメールをください (yiwasscb@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp)。

よろしく申し上げます。

Ecological Research 年間印刷ページ数の増ページについて (以下の提案が全国委員会で承認された。)

提案:

このところ Ecological Research の投稿数が急増しています。それに対する対策として次のことを提案します。

[1] 印刷ページ数の増加。具体的には、年間の印刷ページ数を現在 744 ページのものを 864 ページとする。

[2] ページチャージをとる制限ページ数を下げる。具体的には通常論文で 16 ページまでフリーにしているものを 10 ページまでに下げる (つまり 11 ページ以上だと超過料金をとる)。

[3] 論文採択率を下げて、現在 38 % ある採択率を平均で 30 % 以下にする (日本人の論文で現在 68 % を 50 % 以下とする) こと。

[4] 長い論文については、資料や付録、図などを雑誌のホームページに掲載することを、より強く奨励する。

提案理由と説明:

(1) このところ投稿数が急増しています。これまでの 1 年間で約 300 編、ここ半年分をもとに推定すると 350 編といった投稿数があります。安倍委員長の時には年間投稿数が 100、東委員長の時には 160 - 180 であったことを考えると、300 を超えるというのは相当な上昇です。

(2) 現在平均 38 % の論文採択率です。国内からの投稿 (会員が多い) では 68 %、海外からの投稿では 28 % となっています。国内の投稿と海外の投稿が 30 % と 70 % という割合になっているので、平均 38 % です。これを平均 30 % に圧縮する方向で編集委員にお願いしています。

(3) 加えて特集や受賞論文があります。昨年の例では「food web 特集」が 14 編、受賞論文が 2 編で 16 編。今年と来年では、「biodiversity 特集」が 6 編、「京都賞ワークショップ特集」が 7 編、「LTER 特集」が 17 編、「空間統計学特集」が 6 編、「侵入と進化特集」が 17 編を予定していて、年間 20 - 26 編の印刷が必要です。これについては、採択論文数の減少や論文を短くすることをお願いしています。しかし年間 20 編は必要です。

(4) これまでの論文あたり印刷ページは 9.3 ページです。これを縮小せねばなりません。

(5) 論文の印刷ページを増やすためにそれ以外の分をできる限り削除しました。これまでに編集事務局では、論文の間にあった空白ページをやめました。年末号にある著者インデックス、項目インデックスをやめました。いまは査読者名リストの 1 ページのみです。また

各号の投稿規定も印刷しないようにしました。また、現在のページの構成と配置は、北大事務局のときによく考慮し十分に圧縮されていて、これ以上は減らすことは無理です。

- (6) 「Ecological Research がアジア地域でのプレゼンスを示して、この地域での第1の基礎生態学雑誌としての地位を確保し、そのまま10年間つづけると地域の生態学の活性化とともに自動的に世界のトップクラスに入れる」というのが Ecological Research の長期戦略ですが、そのためにある程度の数の論文を掲載していくことが必要です。でないと他の生態学英文誌がスタートしてしまい、Ecological Research が世界に躍り出る機会は失われます。
- 掲載論文数では、現在年間80編（生態学部門で50位程度）ですが、これを110編（生態学部門で30位）としたいと思えます。それは Journal of Animal Ecology, Functional Ecology などと並ぶレベルなので、一応存在感が示せるレベルです。もちろん Ecology (329), Oikos (248), American Naturalist (164) などよりはずっと少ないですが。

以上の状況に対して、外国人も含めて編集委員の意見をききましたところ、論文の採択率を下げるのはよいとして、平均で3割以下にするのは無理があるとの意見がありました。それは特に若い会員に論文を執筆し掲載するという訓練をするという意味もあるので、大学院生などに英語の論文として研究発表をしてもらうことが、学会の意義として重要だという認識によるものです。会員の投稿論文の採択率が低すぎると会員からの支持がえられないのではないかという気がしています。またアジア諸国（韓国、中国など）からの論文はとても多いが、よい論文も含まれるようになってきていて20%以下にするのは不可能です。また論文の長さを短縮して、残りの資料は雑誌のホームページからダウンロードできるようにすることをサポートする意見が多数ありました。

2月の常任委員会において、年間864ページを印刷することが認められました。また論文のページ数をいろいろな方法で減らして、1編あたり9.3ページを8ページとするようにと指示がありました。そのため上記のようなお願いとなったものです。

これに従って見積もりをしています。

年間の投稿論文数が、300 - 350編とする。

採択率を30%と減らすため（これは日本人論文を50%、外国人論文を20%の採択率とすると実現できる）と、90 - 116編。

これに特集などの論文が年間20編。

1編あたり8ページとして、880 - 1008ページ。

これで864ページを印刷させてもらえると、年間の印刷待ち行列が長くなる率は16 - 144ページ、となります。

もし採択率が今のままの38%ならば、同じ条件で計算すると年あたりに印刷待ち行列の長さは208 - 360ページずつ長くなります。これは1年に6冊のところ9冊分の印刷必要論文がことになり、破綻します。

ということで、とりあえず、864ページの印刷ページ増大をみとめてください。その上で、見積もりに従えるように1年間努力してみます。

以上のことご検討ください。

（文責：巖佐庸）

4. 保全生態学研究編集委員会

- (1) 編集委員長の引継ぎ、編集体制について
新体制

湯本貴和（委員長）、西廣淳、椿宜高（幹事）、石井実、井上幹生、梅原徹、加藤真、角野康郎、倉本宣、小池裕子、小池文人、柴田昌三、高槻成紀、高村典子、館野正樹、田中哲夫、中越信和、中丸麻由子、長谷川雅美、長谷川真理子、早矢仕有子、藤岡正博、堀良通、増田理子、松田裕之、安田雅俊、山本智子、鷺谷いづみ

- * 事務局移行後の編集業務は順調に進んでいる。
- * 原稿への校閲者の手書き書き込みなどもPDFファイルで対応できている。
- * 生態学会HPで校閲者、著者に巨大ファイルをダウンロードできる非公開（暗証つき）のサイトを活用する。
- * 紙媒体不要の会員の扱いについては2年程度をめどに詰める必要がある。

- (2) 2005年1月以降の投稿状況、11-1号の進捗状況

- * 原著その他の一般投稿は順調だが、「あまる」ほどではない。
- * 特集の起案がない
- * 淡水魚類の投稿が急増している。そのため、編集委員を補強した。
- * 11-1号の受理原稿はまだ半分程度。校閲中のものに加えて、保全情報などが必要。
- * 今年度の投稿数は30、そのうち受理数は現時点で12、却下は11（時間切れ、取り下げを含む）、審査中は7つである。

（文責：湯本貴和）

5. 自然保護専門委員会

開催日時：2006年3月24日（11時～14時20分）

開催場所：新潟市新潟コンベンションセンター（朱鷺メッセ）C会場

出席者：増沢武弘（委員長）、中井克樹（副委員長）、立川賢一（幹事）、佐藤謙、紺野康夫、上條隆志、和田直也、河野昭一、鎌田磨人、竹門康弘、清水善和、久保田康裕、井鷲祐司、横畑泰志、村上興正、矢原徹一、松田裕之（以上現委員、任期：2006年3月の総会まで）、鈴木孝男、井田秀行、和田恵次、鈴木信彦（以

上次期委員、任期：2006年3月の総会から2008年3月（予定）の総会までの約2年間。

〔審議事項〕

I部 現委員による審議

(1) 次期委員の確認

各地区会から推薦された地区選出委員、および本委員会で推薦された専門別委員を確認し、全国委員会に提案することにした（本件は、同日、全国委員会で承認された）。なお、「専門」として「環境教育」、「生態系管理」が廃止され、新規に「鳥獣管理」と「自然公園」が提案され、承認された。

地区委員：北海道（佐藤謙、紺野康夫）、東北（竹原明秀、鈴木孝男）、関東（加藤和弘、上條隆志）、中部（和田直也、井田秀行）、近畿（和田恵次、加藤真）、中国四国（安溪遊地、鎌田磨人）、九州（逸見泰久、伊澤雅子、鈴木信彦）

専門別委員：高山・亜高山（増沢武弘）、陸水（竹門康弘）、島嶼（清水善和）、熱帯・亜熱帯（久保田康裕）、遺伝子（井鷲祐司）、寄生物（横畑泰志）、酸性雨（戸塚績）、環境行政（村上興正）、IUCN（矢原徹一）、海洋（立川賢一）、鳥獣管理（三浦慎悟）、自然公園（後日委員会で選出）、外来種問題検討作業部会（村上興正）。

(2) 次期委員会役員を選出

委員長に立川賢一、副委員長に佐藤謙、幹事に清水善和が選出されたので、全国委員会に提案することにした（本件は、同日、全国委員会で承認された）。

II部 現委員と次期委員による合同審議等

(1) 以下の要望書（案）に関する準備状況が説明され検討された。

- 1) 「徳山ダムにおける環境影響評価ならびに保全措置に関する質問状（案）」が提案され、内容を検討した結果、中部地区会に検討を依頼することになった。
- 2) 外来種問題検討作業部会から「(仮) 国内外来種管理に関する要望書（案）」を準備中であるとの報告があった。
- 3) 「(仮) 沖縄ヤンバルヘリパット移設事業中止を求める要望書（案）」が緊急説明され、近日中に要望書（案）の文案を作成し、検討の上、提案することになった。
- 4) 「(仮) 沖縄大学院大学建設予定地の環境保全に関する要望書（案）」を委員会に提出したいとの提案があった。

(2) 委員会活動費の会計

2005年度委員会活動費は、収入予算60万円で、支出317,780円であったことが報告され、承認された。2006年度活動費予算案は、収入予算40万円で、支出として「細見谷アフターケア委員会」、「上関アフターケア委員会」、「外来種問題検討作業部会」および「役員事務費」等に割り振ることが承認された。要望書の提出活動などに今後さらに費用が必要なためとして活動費の増額希望が述べられた。

(3) 委員会運営について

- 1) 役員選挙規定（内規）の修正案が説明され下記の通り承認された。

自然保護専門委員会役員選挙規定（内規）

- (1) 自然保護専門委員会（以下、委員会と略称する）では、以下の役員を置く。

委員長1名、副委員長1名、幹事1名

- (2) 委員長と副委員長の任期は委員と同じ約2年間とし、再任を妨げない。
- (3) 次期の委員長と副委員長の候補者は、現委員の任期終了時に改選作業を行う委員会において承認された次期の委員の中から、現委員により推薦される。
- (4) 次期の委員長と副委員長の選出においては現役員の監視の下、改選作業を行う委員会に出席している現委員により無記名投票で選挙が実施され、過半数を得た候補者を当選者とする。
- (5) 幹事は選出された新委員長により次期の委員の中から推薦され、改選作業を行う委員会で承認を得るものとする。
- (6) 役員に欠員を生じた場合は、本役員選挙規定に基づき後任を選出する。任期は前任者の残余の期間とする。
- (7) 上記規定の改廃は、委員会において行う。

（2006年3月24日 自然保護専門委員会承認）

- 2) 意見公募（パブコメ）に対しては内容判断の上、対応が必要な場合、要望書を提出する方向で検討することとした。
- 3) 専門別委員の選出方法に関連して、専門別委員を地区会選出委員で兼任したり等、委員の総数を少なくした方が良いとの提案があった。種々議論の結果、現状では委員数は多いとは言えないとの意見もあり、従来の選出方法を踏襲して、必要に応じて「専門」の廃止や新設を行うことにした。
- 4) アフターケア委員会等の委員会活動の理解を広めるために、ポスター展示等の広報努力を継続することにした。（なお、本大会では、芦ノ倉沢、細見谷、西表リゾートの3アフターケア委員会からポスターが展示された。）

〔報告事項〕

- (1) 自然保護専門委員会の主な活動として、要望書と意見書等の提出実績の説明があった。

- 1) 「ウエストナイル熱媒介蚊対策に際しての殺虫剤フェンチオンの使用回避についての要望書（第52回大会決議）」を4月6日付けで環境大臣および厚生労働大臣に郵送した。7月22日付けで、厚生労働省より「ウエストナイルウイルスの蚊対策において、フェンチオンの使用を差し控えるよう、関連部局へ要請文書が発行されました。」の報道があった。

- 2) 「緑資源幹線林道、平取・えりも線『様似・えりも区間』の工事中止を求める要望書（第52回大会決議）」を5月10日に、緑資源機構理事長、林野庁長官および北海道知事に郵送、その後5月13日に道政記者クラブに郵送した。

- 3) 「人工洞穴に生息する野生生物、特にコウモリ類に関する保全対策実施の要望（委員長名）」を5月18日付けで学会事務局経由で国土交通省にメールで提出した。上記要望書に関連した3項目の質問に対する回答（委員長名）を、6月17日付けで学会事務局経由で国土交通省にメールで提出した。回答書に関連して、アフターケア委員会では全国のコウモリ類生息洞穴に関する資料（集計表）を作成した。
 - 4) 「特定外来生物等の追加選定に関する要望書（委員長名）」を5月30日付で環境大臣と農林水産大臣に郵送した。
- (2) 以下のアフターケア委員会から現状報告があった。
 - 1) 「ウエストナイル熱媒介蚊対策に際しての殺虫剤フェンチオンの使用回避についての要望書（第52回大会決議）」
 - 2) 「緑資源幹線林道、平取・えりも線「様似・えりも区間」の工事中止を求める要望書 第52回大会決議」
 - 3) 「人工洞穴に生息する野生生物、特にコウモリ類に関する保全対策実施の要望（2005年委員長名）」
 - 4) 「秋田県鳥鹿半島芦ノ倉沢治山事業計画に関する要望書（2004年委員長名）」
 - 5) 「細見谷溪畔林（西中国山地国定公園）を縦貫する大規模林道事業の中止および同溪畔林の保全措置を求める要望書（第50回大会決議）」
 - 6) 「上関原子力発電所に係る環境影響評価についての要望書（第48回大会決議）」
 - (3) 北海道の大規模林道建設など自然破壊に関する現状報告があった。
 - (4) 外来種問題検討作業部会の部会長から部会報告があった（当該部会提出の議事録参照のこと）。
 - (5) 生態系管理委員会の副委員長から委員会報告があった（当該委員会提出の議事録参照のこと）。
 - (6) 「環境保護教育」に関する現状の出版準備は中止して、改めて出版に関する準備を始めることにした。
 - (7) 「寄生生物保全」に関する研究者ネットワークに関する報告があった。

（文責：立川賢一）

6. 外来種検討作業部会

日時：2006年3月24日9時半-11時

場所：朱鷺メッセH会場

出席者：村上・立川・江口・五箇・斉藤・竹門・立川・横畑・中井・石田・石井（潤）・森本・（常田）

議題

- (1) 主要な侵略的外来種の防除マニュアルの作成を行うこととした
 - アライグマ：村上・石井（信）
 - マングース：山田・石井（信）・石田
 - ウチダザリガニ：斉藤
 - サケ科外来種：斉藤
 - オオグチバス：中井・竹門
 - セイヨウオオマルハナバチ：五箇
 - アルゼンチンアリ：五箇

(2) 国内外来種の管理

- 1) 放流実態およびその影響の把握
放生事業・放鳥事業・ホテル放流事業など
 - 2) 上記に基づいた放流事業中止要望書の提出
 - 3) 上記規制方法の検討
 - 4) 外来種のリスク管理と評価に関する検討
今後未判定外来生物が出てくる可能性が高く、この基準を含めて検討を開始する。
- (3) 外来種ハンドブックの新版の出版
従来は旧版の改訂を考えていたが外来生物法に基づいた新たな枠組みを考えることとする。侵略的外来種の管理を含んで今後の行政が使えるハンドブックを志向する。
このために章構成の段階から皆の意見を聞き、これをもとに村上・鷺谷がまとめる。
 - (4) 外来生物法の追加生物の検討
緑化植物の取り扱いに関する事項の検討
その他優先的に指定すべき生物の検討
すでに蔓延した外来生物の取り扱いの検討
上記2と4に関しては懇談会が開始される予定なので何らかの予算措置が可能か打診を行い、可能ならば検討委員会を開催する方向で考える。

（文責：村上興正）

7. 将来計画専門委員会報告

- (1) 総合地球環境科学研究所および京大生態学研究センターの現状と将来構想について
生態研センターの人事について報告があった。センターの教授・助教授ポスト13のうち、1ポスト（定員の5%）は凍結されている。法人化後様々な動きがあるが、センターは生態学を中心として現在のあり方を維持して行く方針である。10年の時限はなくなったが、法人として6年単位の中期計画にもとづいて運営される。また、地球研との連携を今後とも連携関係を強めて行く。
総合地球環境学研究所では、プロジェクトを選考するプロセスが大きく変わり、2005年4月からインキュベーション研究は一般共同研究として公募となった。ただし、フィージビリティ研究が評価委員会で審査に合格して本研究に移るまでにプロジェクト・リーダーが地球研に移籍することが前提である。2006年4月に応募が締め切られるが、京大生態学研究センターからも応募予定で、他機関からも生態学関連分野で応募が予定されている。

2006年は谷内プロジェクトが本研究最終年度、中静プロジェクトが本研究4年目、湯本プロジェクトが本研究1年目になる。谷内プロジェクトは地球研プロジェクトの出発時点でのプロジェクトであり、今後のプロジェクト終了時点での成果公表などについての先例となる。また川端プロジェクトが3月の評価委員会を通過して、再来年度本研究開始が決まった。プロジェクト経費については従前と比べて実質3割近く削減されつつあり、人間の生存基盤としての生物多様性の創出の重要性を学会の内外にアピールするなど、今後

の対策を考える必要がある。

京都大学生態学研究センターとの連携では、おもに新規プロジェクトへの応募（一般共同研究）と教員人事について、定期的に情報交換が行われており、地球研プロジェクトのうちの3つは恒常的に維持する体制を考えているが、センターと地球研との人事交流のあり方についてはセンターとしての戦略もふまえて対応していく必要がある。

(2) 学術会議の動向について

学術会議の新体制の構築が遅れている。2006年3月15日に松本オプザバーが連携会員に任命された。今回、任命されたのは478名である。これに加えて特任連携会員133名が任命された。2006年4月6日に第一回の会合（説明会）が開かれる予定である。

第二部（生物・医薬・農を含む、幹事：鷺谷会員）の応用生物学委員会（委員長：鷺谷会員）のもとに生態科学分科会を設置することが決まった。応用生物学委員会傘下には、ゲノム科学、生物工学などとともに行動生物学分科会もある。連携会員の松本忠夫・長谷川真理子両氏と相談して早急に生態科学分科会を動かしたい。

三部に環境学委員会があり、鷺谷会員が委員となっている。単に政府の諮問の機関ではないボトムアップ型の科学者の意見集約に寄与する学術会議をめざしている。以前と比べて政府との関係が強化されており、科学技術担当大臣との懇談や各省の科学技術担当者との懇談の機会も多い。また、国民に開かれた学術会議をアピールするため、4月下旬にサイエンスカフェを全国いっせいに開催するなどの計画がすすめられている。

(3) 若手・女性研究者をめぐる問題について

・男女共同参画学協会連絡会の動向

2005年4月以後、男女共同参画学協会連絡会の運営委員会が、第3期3回、第4期2回開催されそのうち4回に可知が参加した。自然科学系の各学協会では男女共同参画に積極的に取り組んでいる。詳しくは、<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>を参照されたい。

・連絡会設立3周年シンポジウム

2005年10月7日（金）にお茶の水女子大学キャンパスで開催された男女共同参画学協会連絡会（<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>）の設立3周年シンポジウムに、生態学会からは可知直毅（将来計画委員長）、西谷里美会員（日本医大）、大曾根陽子会員（森林総合研究所）の3名が参加した。今回のシンポジウムのテーマは「21世紀の産業を拓く男女共同参画社会」であった。なお、シンポの参加報告をニュースレター No.8（2005年12月）に掲載した。

・内閣府が実施する理系のキャリアパスをめざす女性支援のための事業「チャレンジキャンペーン」に協力団体として登録した。男女共同参画推進に関するシンポジウムなどを開催することが期待されている。

・若手支援・男女共同参画推進小委員会の設置について

植物学会、動物学会、森林学会など、多くの学協会では、男女共同参画・若手支援のための常設委員会が設置されており、この問題に積極的に取り組んでいる。

生態学を志す、女性を含む若い世代にアピールするなど、生態学会としても、学会の将来戦略のひとつとしてこの問題にとりくむ必要がある。そのため、将来計画専門委員会の中に若手支援・男女共同参画推進小委員会を設置することとした。本小委員会のメンバーとして新たに将来計画専門委員を数名補充することを検討する。今後、メール上で議論し、全国委員会に提案することとなった。

(4) 大学院生を中心とする若手研究者の、国内外での研修のための基金の必要性に対するアピール

昨年度、全国委員会に提案し了承された、大学院生を指導する教員である生態学会員に対して大学院生に国内外での研修の機会を積極的に与えることについて、将来計画委員会としての「お願い文」を生態学会和文誌、学会HP、メーリングリスト（jeconet）などを通して広報することを早急を実現する。

(5) 将来計画委員会の体制について

委員会構成のさらなる若返りと、委員会の役割について問題提起があった。本委員会は、学会の将来にかかわるさまざまな問題（男女共同参画、若手支援生態学関係の新たなキャリアパス、学会誌のあり方、学会としての国際的なリーダーシップ等）を中長期的な戦略として議論し、必要な対応を常任委員会・全国委員会に提案し、それを実現する体制を整えるという役割をもつ。新たな問題を発掘するためにアンケートを実施することも今後検討する。また、一般社会や行政に対しても、生態学の社会的な重要性や学問としての面白さを積極的にアピールすべきであるという意見が出された。関連する他の専門委員会や常任委員会とも連携しながらこれらの問題に対処していきたい。委員長・副委員長の交代も念頭において、今後さらなる委員会組織の若返りと活性化をめざして、各委員の意見のとりまとめと調整を委員長が中心となってすすめることとなった。

(6) その他

・科学技術振興機構（JST）の動向について説明と情報提供

4月から第3期科学技術基本計画がスタートする（予算総額は25兆円）。生態学に関連の深い課題が、環境PT（Project Team）の課題としてあげられている（鷺谷会長、中静会員、渡辺信会員がメンバーに入っている）。具体的な課題に関しては、

<http://www8.cao.go.jp/cstp/project/bunyabetu/kankyoindex.html>

などを参照されたい。

第3期科学技術基本計画の関連予算に関しては、総額のみが決定しており、このあと配分が決まっていく。文部科学省（特に開発局）は、イノベーションにつながる研究開発への助成を重点的に行う姿勢を示している。基礎分野への注目度が低下しつつあるので、何らかの対策が必要である。学会として文科省（トップクラスに加え担当課長・課長補佐クラスにも）、内閣府総合科学技術会議などへの働きかけが今後重要となるだろう。

上記の情報提供をふまえ、将来計画専門委員会としても、常任委員会と連携しながら、学会の対応を継続して検討することとした。また、本委員会で今後議論すべき問題として、ポストポストドク問題、新しいキャリアパスの開発と提言、シニア研究者の新たなキャリアパス、学会が認定する資格制度（エコツーリストの生態学からみた質を保証するものなど）などが指摘された。

(文責：可知直毅)

8. 生態学教育専門委員会報告

本年度の活動

- (1) 委員会を5回開催した(3,6,8,10,12月)。
- (2) 生態学会編「生態学入門」の販売は順調で3刷まで5000部を販売し4刷を印刷した。
- (3) 2005年7月10日～17日に北京で開催された国際生物学オリンピックに情報収集のためオブザーバーとして久保田康裕氏を派遣した。それを受けて委員会としての対応を協議し報告書を出すことにした。生態学会誌4月号に掲載される。委員会の活動のため別刷り500部を注文した。
- (4) 2005年8月3～4日に大阪で開かれた「日本生物教育会」において、展示ブースを持ち「生態学教育」についての意見交換および「生態学入門」の宣伝を行った。
- (5) 2005年12月10日、大阪市自然史博物館にて日本生物教育会近畿ブロック主催、本委員会共催で「生態学教育シンポジウム」を開催した。70名の参加者を得て盛会だった。
- (6) 本大会で委員の一部を交代し、第5期委員会を発足させ、全国委員会で承認された。新委員会のメンバーは、山村靖夫(委員長予定)、木村和喜夫、嶋田正和(全国委員)、西脇亜也、林 浩二、広瀬祐司、以上6名留任、久保田康裕、中村雅彦、山路恵子、以上3名新任。

今後の方針

- (1) 第5期の方針
第1期報告書の基本方針を検討し、新しい状況に即した課題に取り組みながら発展的に継続することを確認した。
- (2) 「生態学入門」の普及促進と改訂について
書評で指摘された問題点を検討した。今後さらに会員からの意見を聞きたい。改訂(2版)では、それを反映させ情報が古くなったところを修正。
- (3) 生態学の実験・実習書編集の検討
小・中・高の発展的な実験・観察・研究の具体的な提案を考える。まず、次回の委員会で、「現状把握」が必要。
- (4) 日本生物教育会全国大会(鳥根8月8-9日)への参加について
委員が参加し「生態学入門」の宣伝と情報交換を行う。
- (5) 「生態学教育シンポジウム」(日本生物教育会関東ブロックとの共催)の取り組みについて
今年の秋に東京で開催できるよう準備を開始する。

- (6) 国際生物学オリンピックについて
個人的な要請は来ているが、学会への正式な要請は来ていない。現段階ではどのように対応するか結論は出せない。

- (7) その他
 - ・ウェブページの充実と管理について
 - ・委員会内メーリングリストの構築など
 - ・次回委員会を6月に開催する。

(文責：山村靖夫)

9. 生態系管理専門委員会報告

(1) 活動記録

- 1) 自然再生事業レビュー合宿(1月14日・15日)
 - ①7つの事業についてレビュー、問題点を整理し、自然再生ハンドブック目次案を作成した。
- 2) 生態系管理専門委員会(3月24日)
 - ①自然再生ハンドブック目次案を検討し、今後の作業日程を確認した。
 - ②自然再生ハンドブックの基本性格を次のように設定した。
 - ・「自然再生事業指針」の普及書として位置づけ、指針に沿って具体的な事例を紹介し、わかりやすい解説を加える。
 - ・教科書ではなく、ハンドブックである。とくに、自然再生事業に関わる行政官・市民に役立つ本にする。
 - ・網羅・包括的ではなく、生態学者が関わっている事例の検討を中心にする。
- 3) 自由集会：自然再生事業の現状と課題(3月27日開催予定)

(2) 今後の日程

- ・5月末 「事業事例」執筆担当者がパワーポイントファイルを準備する。「自然再生事業指針の解説」に役立つような図・資料をもちこむ。
- ・6月末 上記のpptファイルをもとに、矢原が「自然再生事業指針の解説」の原稿を準備する。
- ・8月中 委員会合宿を実施し、「自然再生事業指針の解説」の原稿を討議し、ハンドブックの目次を最終決定し、執筆分担をする。
- ・12月 原稿完成
- ・6月頃 「自然再生ハンドブック」出版
- ・その後 「自然再生ハンドブック」をテキストに自然再生講習会を開催し、受講者に「自然再生アドバイザー」の資格を出す。

(3) 自然再生ハンドブック目次案(抄)

- 1 本書を読む方へ
 - 2 自然再生事業とは
 - 3 自然再生事業指針の解説
 - 4 自然再生事業の達成点と課題
 - 5 事業事例
- 付録 自然再生事業指針、チェックリスト、用語集

(文責：矢原徹一)

10. 大規模長期生態学専門委員会報告

委員会メンバー

中静透（地球研、委員長）小泉博（岐阜大学）、東正剛（北海道大学）、甲山隆司（北海道大学）、占部城太郎（東北大学）、谷内茂雄（総合地球環境学研究所）、三宅洋（愛媛大学）、佐竹暁子（京都大学、Princeton Univ）、酒井章子（京都大学）、田中健太（北海道大学、Sheffield Univ）、福島路生（国立環境研） *うち出席者は、甲山、谷内、三宅、佐竹、酒井、中静

オブザーバー：日浦勉、大手信人、鈴木準一郎、仲岡雅裕、三枝信子、中村誠宏

(1) 3年間の活動の総括

1) 委員会の活動目的

- ①大規模長期生態学に関するシンポジウム開催
- ②現存する国際的プログラムの紹介、学会との結びつき強化
- ③大規模長期生態学を日本で活性化するために必要な方策の提案

2) 主な活動記録

2003年3月 筑波大会総会にて発足
2003年5月2日 メンバー承認
2004年8月20日 地球観測国際戦略0次案に対するコメント作成と提出
2004年8月25日 第1回委員会開催
2004年8月2日 委員会主催シンポジウム「大規模長期生態学とは何か」開催（釧路）
2004年10月12-13日 IGBP-GLP (Land) 第1回シンポジウム共催（札幌）
「統合陸域研究計画に向けたダイアログ形成」、北海道大学
2004年10月13日 第2回委員会開催、JST 研究開発戦略センターとの対話
2005年3月28日 第3回委員会開催
2005年3月28日 委員会主催シンポジウム「大規模操作実験」開催（大阪）
2005年4月23日 DIVERSITAS シンポジウム（東京）
2005年8月 シンポジウム「大規模長期生態学とは何か」を生態学会誌特集として発表。同じ号に、国際プログラムの紹介記事を掲載。
2005年10月31日～11月2日 地球フロンティア研究センター主催 The 11th Japan-US Workshop on Global Change “Biodiversity, Ecosystem Function, and Dynamic Human-Nature Interactions” 参加
2005年 シンポジウム「大規模操作実験」を生態学会誌特集として編集
2006年1月18日 文部科学省研究開発課、地球・環境科学技術推進室に陳情
2006年3月24日 第4回委員会開催
2006年3月25日 フォーラム「大規模研究プロジェクト：傾向と対策」開催（予定）
2006年3月20-23日 東アジア太平洋ILTER 会議出席

3) 主な活動の成果と問題点

<委員会主催シンポジウム>

2回のシンポジウムを行い、生態学会誌に特集として掲載した。また、3年目はフォーラムという形で催す予定でいる（25日）。参加者も多く、大規模な研究や実験的研究、大規模プロジェクトなどへのかかわり方を一般会員に伝える意味で、一定の役割を果たせたと思う。ただ、生態学会の外部もふくめてどのくらい貢献できているのか不明瞭な点がある。

<国際的プログラムと学会の結びつき強化>

第1回シンポジウムの特集と同時に、国際的プログラム（IGBP, DIVERSITAS, Land, START など）を紹介する記事を日本生態学会誌に掲載した。また、今後学と国際的プログラムの結びつきを強めるための方策を議論し、実際には DIVERSITAS のシンポジウムや地球フロンティア主催の日米会議などにも参加し、情報を集めるとともに、連携を深める努力をした。地球観測国際戦略（GEOS）の観測項目に関しては、パブリックコメントを提出した。また、占部・甲山委員が中心となって北海道大学に GLP のノードオフィス設置の方向で動いているほか、JaLTER グループによる東アジア太平洋ILTER 会議をサポートした。IHDP などより広い範囲も含めて、今後とも、こうした活動を委員会を前面に出した形で行っていく必要がある。

<大規模長期生態学の活性化>

総合科学技術会議の動向の把握にところがけたほか、JST 研究開発戦略センターとの対話を行い、同センター主催の各種の会議やセミナーに協力した。また、文部科学省研究開発課にも陳情を行った。残念ながら、生態系・生物多様性分野での戦略目標をたてるまでにはいたらなかったが、今後も JST の動向には注意しながら機会をうかがう必要がある。このような、ロビー活動を、今後どのようにやっていくかは検討が必要である。

(2) 今後の委員会運営

中静が国際対応委員長となったことにより、委員長を日浦勉氏（北海道大学）に交代し、委員も大幅に入れ替える。これまで3年間の活動をふまえて、今後の活動方針を議論する。

(3) 新委員の承認（全国大会の承認事項）

委員長：日浦勉

委員：大手信人、鈴木準一郎、仲岡雅裕、三枝信子、中村誠宏、佐竹暁子（留任）、甲山隆司（留任）、占部城太郎（留任）、中静透（留任）

このほかにも、情報やアウトリーチなどで数名の委員を増やす計画があり、候補が決定次第、承認を受けたい。

（文責：中静透）

11. 電子化検討委員会

報告事項

(1) 日本生態学会の専用サーバーの使用状況

レンタルしている専用サーバを、esj.ne.jp ドメインを

取得して運用している。このサーバ上では、学会公式ページのほか、大会企画委員会内部連絡用ページ、保全生態学研究のページが運用されている。学会公式ページは、これまでの置き場所から完全移転した。

2006年3月の53回生態学会大会およびEAFES2の公式サイトも、本サーバ上に構築している。オンラインでの参加登録、要旨登録システムを作製し、大きなトラブルはなく運用している。

学会サーバは、地区会ページ用にも使用可能としている。これまでのところ中国四国地方からのみ利用希望が出され、領域を割当てた。3月12日現在では、実質的な運用は始まっていないようである。

そのほか、メーリングリスト（大会企画委員会、電子化検討委員会、常任委員会）が運用中である。

今後の課題

- (1) 運用開始当初はさまざまな突発的作業が発生し、これを外注やアルバイト雇用で処理するのはむずかしい。このため、一部の委員に実質的作業が集中している。スキルを持った委員の補充が必要である。
- (2) 学会の公式ページについて、とりあえずは旧来のものを移転しただけである。今後、全体の構成、内容、デザインなどを再考する必要があるだろう。そのために、サイト構築の経験などのある委員の補充が必要であろう。
- (3) 大会サイトの運営方法には、いろいろ改善の余地があるが、常設の大会企画委員会が引き続き管理に関与していくため、段階的な改善・充実が望める。
(文責：竹中明夫)

12. 事務局整備検討委員会

- (1) 事務局事務部の固定化
 - 1) 事務所の整備
 - a) 事務所の借用契約（2年契約、2年目で継続の可否を判断：常任委員会）
 - b) 事務所の整備終了
 - 2) 事務局事務部の人員整備と雇用費用
 - a) 事務員の人数（常勤3名）（事務部長：鈴木、主任：遊磨、事務員：堀池）
事務局事務：鈴木、会員管理・編集事務：遊磨、大会企画委員会・国際対応 EAFES：堀池
 - b) 事務部の事務員雇用の賃金総額を当面（2年間）はおおよそ1500万円とする（2005年実績）。ただし、その後は、和文誌の編集事務を京都事務部に集約するので、1350万円ほどとなる見通し。
 - c) 事務員の人事・会計管理（公認会計士の依頼、被雇用者の雇用保険・労災保険などに「みなし法人」格で加入、就業規則整備済み）。
- (2) 編集事務
 - 1) 土倉事務所との印刷契約：印刷会社については編集委員長（幹事）と土倉事務所の両方で検討する。
 - 2) 編集事務の整備
 - 3) 電子化整備
・当面は電子投稿とハードコピー投稿の両方を維持する。

- ・審査の電子化などは電子化整備検討委員会と合議する。
- ・和文誌についても近い将来、受理段階で電子ジャーナルとして公表できるシステムを構築する。
- (3) 常任委員会・全国委員会事務
 - 1) 委員会の会議の準備段階ではテレビ電話システムを積極的に利用する。
幹事長（幹事）が土倉事務所内の事務部を訪ねる、または事務員が幹事長（幹事）を訪れる機会を年間3～4回ほど設ける。
- (4) 大会企画委員会及び国際対応委員会の事務
 - 1) 大会企画委員会の事務において、大会参加登録、発表登録、講演要旨登録などは学会事務部のサーバにHPを設置して、ここで一括管理、整理、編集するシステムを電子化検討委員会と合議して構築する。このオペレーションを事務局事務員が行う。技術的サポートは電子化整備検討委員会の委員が行う<HP作成済み>。また、大会参加者（会員）、発表者の会費納入状況のチェックのために、会員管理システムを利用する。
 - 2) 国際対応委員会の事務において、EAFESのHP更新事務などのオペレーション、EAFESコンGRESSやビジネスミーティングの招聘手続き、対外交的な事務連絡、EAFESコンGRESS開催時の参加費の管理・参加者名簿の管理など事務局が行う。
- (5) 会員リスト・入退会管理、会費請求事務
 - 1) 会員管理システムの新たな構築を電子化整備検討委員会と協議する。本年度は土倉事務所のシステムを使用し、本年度に新たな会員管理システムを構築する。
 - 2) 学会事務局→会員、会員→学会事務局などのメーリングシステムを整備する。ただし、システム管理については、ウイルス対策に万全を尽くすとともに、利用ルールを整備し、著作権の侵害、誹謗中傷デマ情報の配信、個人情報の遺漏がないような体制を整備する。
 - 3) 会員リストなどは一般公開をさける。個人情報の会員リストへの記載事項などについては事前確認など、新たな法制度に対応した会員リストの作成を検討する。
- (6) ホームページの更新・管理事務、ニュースレター
 - 1) 学会事務部のサーバで学会、大会、地区会、EAFESのHPは一括整備する。<整備済み>
 - 2) ニュースレターも学会事務部のHPに掲載する。<整備済み>
 - 3) この管理と更新は電子化整備検討委員会のサポートのもと、事務局事務員が行う。
(文責：中根周歩)

13. 大会企画委員会

○活動報告

- (1) 運営部会、プログラム部会、シンポジウム企画部会、ポスター賞部会の4部会で役割を分担し、実行委員会、EAFES2実行委員会、学会事務局との連携の元で、日

本生態学会第53回大会の企画を行った。新体制での大会の企画・運営は初めての経験であり、EAFES2との合同開催となったこともあり問題点も残したが、現地の負担を減らし大会企画・運営のノウハウを蓄積するという委員会設置の趣旨の実現に向けて大きく前進した。

- (2) 参加・講演受付システムと講演要旨受付システムを作製し、学会の専用サーバ上で稼働させた。プログラム、要旨集の印刷原稿の作製作業を、学会事務局と相補的に進めた。

○委員の補充

以下の理由で全国委員会に委員の補充を要請し認められた。

i) 業務量と比べて委員の数が不足。

- ii) 現委員全員の任期が2007年12月なので、新委員を補充し、円滑な引継ぎと大会企画のノウハウの蓄積を図る必要がある。

新委員（任期2006年1月から）

村岡裕由（岐阜大）、箕口秀夫（新潟大）、関島恒夫（新潟大）、佐竹暁子（Princeton Univ）、坂田宏志（兵庫県立大／兵庫県立人と自然の博物館）、陀安一郎（京大生態研センター）、上條隆志（筑波大）、久米篤（富山大）、大森浩二（愛媛大）

委員の追認及び名簿記載漏れの確認（任期2005年1月から）

津田智（岐阜大）、中静透（総合地球環境学研究所）、夏原由博（阪府大）

退任：中坪孝之（広島大）旧事務局幹事

○今後の課題

(1) 組織関係

・委員会定数と委員長・部会長任期（確認）

20名から25名程度。毎年7.8名を改選。大会企画委員会が推薦し、全国委員会の承認を求める。分野、年齢層、性別への配慮。委員長・副委員長・部会長任期は2年で、再任を禁ず。

・次回愛媛大会との連携

各部会に対する現地での対応者の選任を大森実行委員長に依頼。

(2) プログラム編成、プログラム・講演要旨集編集

・申し込み情報のチェックの負担軽減のためのアルバイト採用。受付システムの再検討。

・講演日等の希望は、条件を限定して受けつけるが、実現の確約はしない方向で検討。

・プログラムデータの書式の定型化による作業の簡素化と印刷データの正確化。

・分業による負担軽減と、情報の集中化によるチェック漏れの削減の両立。

・受付締め切り後に、申込者による訂正期間を設ける。

・マスターデータによるデータ管理の一元化と、確認要員の配置、事務局との連携。

(3) 大会ウェブページ関係

・ウェブページ運営の一本化を、新潟大会、愛媛大会の担当者と協議しながら検討。

(4) シンポジウム関係

・フォーラムの位置づけ（確認）

原則として学会内委員会が主催し、特定の課題について委員会での検討経過を説明し、学会員及び大会参加の非会員との意見交換を行う場。

・重複講演の制限（確認）

大会企画委員会が主催する企画シンポジウム、学会内各種委員会が主催するフォーラムを除き、会員が企画者または講演者として参加できる公募シンポジウムは一つに限る。複数の公募シンポジウムにコメンテーターとして関わることは制限しないが、大会企画委員会では日程調整はしない。

・公募シンポジウムでの講演資格（確認）

原則として日本生態学会員に限る。ただし、企画者の申請に基づき、当該シンポの目的を達成するために非会員を講演者に加える必要があると大会企画委員会が判断した場合はその限りではない。ただし、非会員としての参加費の支払いを求める。

・企画シンポジウムの非会員の招待講演者については、参加費・懇親会費を求めない。

・シンポジウムのあり方

公募シンポジウムをレベルアップし、個別講演の羅列に終わらない充実したシンポを実現するため、シンポジウム企画部会主導のピアレビューを実施する。

・シンポジウムの種別

上記の公募シンポへの審査の導入にとまない、従来型の公募シンポを「テーマ別セッション（仮称）」として分離する。

・自由集会の採否

自由集会は、会場費負担も大きいので、会場の収容数を超えた場合は抽選とする。

(5) ポスター賞関係

・大会ではなく、学会が授与する賞としての位置づけにともなう手続きの明確化。

・口頭発表とポスター発表のセッション区分の統一。賞の審査に適したセッション区分。

・ポスター発表数と賞の数の関係。

(6) EAFES 関連

・日本生態学会大会と同時開催の場合は実行委員会の統一を検討すべき。

・JES53, EAFES2 一括レジストレーション、講演資格の統一、情報の共有。

・参加費の統一と事前支払いの徹底。

・重複講演防止の徹底、講演キャンセル対策、実行委員会からの依頼に責任を持って対応するオーガナイザーの選任。

（文責：難波利幸）

14. 国際対応委員会

(1) 委員メンバー

菊澤喜八郎（委員長、2005年12月で交代）、中静透（2006年1月より委員長）、大沢雅彦、大園享司、北山兼弘、杉本敦子、中根周歩

(2) 活動内容

- 1) 2nd EAFES Congress 実行
 実行委員会の開催 (2005年2月)、EAFES2 フェア
 ストサーキュラーの印刷 (4月)、参加申し込み開
 始、招待状の発行、シンポジウムの企画 (10 - 11
 月)
 実行委員会を拡大 (神松幸弘、関野樹、湯本貴和)
 生態学会大会との合同会議 (12月)、実行 (2006年
 3月)
- 2) 第9回 INTECOL (Montreal) 8月
 INTECOL 対応委員として湯本貴和氏にお願いした
 (現在は藤原一繪氏)
 イギリス・アメリカ生態学会会長主催の朝食会に出
 席
 EAFES 臨時ビジネスミーティング
 第2回コンGRESについて中国、韓国に説明
- 3) EAFES ビジネスミーティング 北京 9月
 各国生態学会の活動状況
 コンGRESについての説明
 ロゴ、ニュースレターなどについて
 コンGRES以外の活動について
 (トレーニングコース、学生の交換、共同研究、雑
 誌の刊行などの提案あり)
- 4) 委員長の交代について 12月
 菊沢喜八郎が生態学会会長就任のため中静透に交代
- 5) INTECOL-EAFES 合同ミーティング および
 EAFES ビジネスミーティング
 新潟 2006年3月25日
 INTECOL と EAFES の共同事業について、EAFES
 の次年度以降の活動について

- (3) 全国大会承認事項
 湯本貴和氏 (地球研) を INTECOL の Board Member
 として委員に加えることが承認された。

(文責：中静透)

15. 野外安全管理委員会報告

- (1) 安全管理に関するマニュアル作成
 4月10日までに委員会内のたたき台を各委員に知
 らせ、6月末までに暫定版を作成し公開する。暫定版
 に寄せられた意見などを反映させて、マニュアルを修
 正していく。
- (2) 委員の追加
 以下の3氏 (敬称略) にお願いする。なお、学会大
 会終了までにすべての方から内諾を得た。
 関野 樹 (総合地球環境学研究所)
 仲岡雅裕 (千葉大学)
 本間航介 (新潟大学)
- (3) 電子関係
 2つのメールアドレスを発給を事務局に要請する。
 1つは安全に関する意見や情報提供の窓口で、もう1
 つは事故が起きてしまった際の非常連絡用とする。
 野外調査安全管理マニュアルや関連情報を載せるた
 め、生態学会のウェブサイトスペースを確保するこ
 とを事務局に要請する。また、マニュアル作成作業
 のための Wiki 用のスペース確保を事務局に要請する。

- (4) 事故保険について

フィールド保険検討委員会より報告があった。ニッ
 セイからの回答を検討したところ、とく必要性の高い
 搜索費用を主にカバーする保険については、リスクと
 採算の点および認可を受けられる可能性の点の2つで
 きわめて困難であると考えられた。そのため、いった
 ん、フィールド保険検討委員会はいったん解散し、保
 険に関してはマニュアルの作成などを通じて本委員
 会で考えていくこととする。事故保険委員会からは、こ
 の間の検討に関する情報を受け取り、マニュアル作成
 などに生かしていく。

(文責：粕谷英一)

B. 承認事項

1. 2005 年度決算

収 入 の 部			支 出 の 部		
	05 予算	05 決算		05 予算	05 決算
会費			会誌発行費	24,375,000	27,534,780
一般会員	30,000,000	31,663,156	ER 印刷及び発送費	15,625,000	15,853,807
学生会員	5,200,000	5,730,200	生態誌印刷及び発送費	5,000,000	7,871,183
団体会員	3,500,000	3,336,000	保全誌印刷及び発送費	1,800,000	1,871,487
賛助会員	0	40,000	ニュースレター印刷費	1,200,000	1,579,725
外国会員	200,000	396,900	編集費	470,000	358,578
和文誌購読	700,000	942,500	封筒代	280,000	0
会費小計	39,600,000	42,108,756	会議費	150,000	143,308
BS よりの還元金	1,000,000	1,097,145	旅費・交通費	3,000,000	2,708,696
Back No. 売り上げ	100,000	73,300	人件費（既存事務局）	4,500,000	4,505,490
科研費・刊行助成金	9,900,000	8,600,000	（新固定事務局）	4,500,000	5,567,300
出版印税	200,000	1,131,732	地区会へ還元金	1,800,000	1,812,805
利子収入	100	93	大会補助	2,300,000	2,320,500
雑収入	500,000	537,903	公開講演会	200,000	0
大会還元金	2,000,000	2,000,000	INTECOL 会費	470,000	409,484
ER 超過ページ代		36,000	業務委託費	5,000,000	5,136,300
前年度繰越金	10,187,525	10,187,525	事務費	4,180,000	4,131,177
前年特別会計からの組込み分		19,816,379	通信費	1,200,000	1,425,176
			消耗品費	30,000	394,175
			雑費	430,000	671,076
			サーバーレンタル料	360,000	481,750
			事務所賃貸料（電気代含む）	1,800,000	970,000
			会計監査（税理士）	360,000	189,000
			各種委員会費	1,500,000	938,230
			名簿作成費積立金	1,300,000	—
			特別会計 II への移行金	6,400,000	—
			次年度繰越金	3,812,625	25,917,724
			選挙費		462,994
			EAFES 費用		481,255
			事務所移転費用等		861,985
			固定資産取得支出		2,656,805
合 計	63,487,625	85,588,833	合 計	63,487,625	85,588,833

単年度収入 55,548,929

単年度支出 55,208,070

特別会計 I（宮地基金）

収 入 の 部			支 出 の 部		
	05 予算	05 決算		05 予算	05 決算
前年度繰越金	5,894,175	5,894,175	宮地賞賞金	600,000	600,000
預金利息	0	83	次年度繰越金	5,294,175	5,294,258
合 計	5,894,175	5,894,258	合 計	5,894,175	5,894,258

2. 第 55 回大会開催地

55 回大会は九州地区会が担当し、2008 年 3 月に福岡にて行うことが承認された。

3. 学会誌を紙媒体として配布を受け付けない会員の会費について

学会誌を紙媒体として配布を受け付けない会員の会費について以下の案が提案され承認された。

近年、日本生態学会の雑誌である“Ecological Research”や「日本生態学会誌」などが Springer や国立情報研究所のウェブ（下記参照）で会員ならば自由に閲覧できる環境が整備されています（日本生態学会誌については非会員でも可能）。そのため、これらの雑誌を紙媒体での提供を必要としないとする会員が少なからずおられます。また、夫婦とも会員のため複数の冊子を必要としない場合や大学研究室で多数の会員全員が紙媒体を受取る必要はないとの判断もあります。

そこで、紙資源の節約や書棚のスペースなどの確保から、紙媒体を必要としない会員の会費を、雑誌の紙代や郵送の実費分を差引いた金額を会費として徴収することを提案します。しかし、その差額は決して高額ではありません。それは、仮に少数でも雑誌を印刷すれば（図書館などの購読者は紙媒体を求めます）、その雑誌の印刷費用は、現状の全会員数を印刷することと大差はないからです。

また、雑誌「保全生態学研究」は、国立情報研究所のウェブで閲覧するためには所属機関が契約しているか、利用者が直接契約（契約料年間 2,100 円）することが必要です。また、生態学会の雑誌として発刊されてから日が浅いので、今回の対象から外すといたします。

よって、“Ecological Research”と「日本生態学会誌」においては、会員がそれぞれの雑誌を紙媒体としての提供を受けなくても良いと判断し、そのことを申請することによって、規定の額を差引いた会費を納めるものとなります。

<雑誌閲覧ウェブ>

Ecological Research : <http://www.springer.com>

（ただし、会員に提供されている key word と pass word がアクセスに必要）

日本生態学会誌、保全生態学研究 :

http://ci.nii.ac.jp/organ/journal/INT1000001567_jp.html

（ただし、「保全生態学研究」は国立情報研究所との契約が必要）

紙媒体を希望しない会員への会費割引案

ER 不要→ 900 円割引

生態誌不要→ 600 円割引

4. 名誉会員推薦について

小野勇一氏が名誉会員に推薦され、総会にて承認された。

○小野勇一氏

1930（昭和 5）年 4 月 21 日生

1954（昭和 29）年 3 月 九州大学理学部生物学科卒業
1966（昭和 41）年 九州大学理学部助教授
1974（昭和 49）年 同教授
1994（平成 6）年 退官 九州大学名誉教授
1995（平成 7）年 環境庁環境保全功労賞受賞
2001（平成 13）年 4 月より 北九州市立自然史博物館館長

○日本生態学会役員履歴

1977 - 1979 年 学会誌編集幹事

1976 - 1986 年 将来計画委員会 委員長

1987 - 1989 年 幹事長

1998 - 1999 年 会長

1978 年 九州地区会 会長

1982 - 1986 年 九州地区会 会長

1991 - 1996 年 九州地区会 会長

<名誉会員推挙に関連した手続き等>

A. 推挙されるべきものの満たすべき要件

1. 75 歳以上の日本生態学会会員で、日本生態学会および生態学会への貢献が顕著であること。（例えば、学会長であった者や生態学の分野における業績が顕著なものなどで、現職の会長は除く）

B. 名誉会員に与えられる特典

1. 学会費の免除を受けることができる。
2. 大会参加費の免除を受けることができる。
3. 選挙権および被選挙権を持たない。

C. 推挙等の手続き

1. 全国委員や常任委員または地区会の推薦（推薦人による書類作成）
2. 常任委員会で審議して推挙案を作り、全国委員会で審議・決定し、総会の承認を受け、本人に諾否を確認する。
3. 会長から本人へ連絡・通知する。

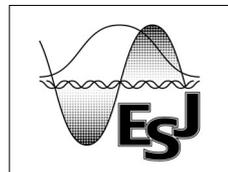
5. 日本生態学会ロゴマークについて

ニュースレター No.8 および学会 HP にて生態学会ロゴマークを募集したところ 11 点の応募がありました。応募作品を大会期間中に掲示し、大会参加者の投票を参考に常任委員及び全国委員会で選考した結果、以下の 2 点が日本生態学会ロゴマークとして提案され総会にて承認されました。なお、選ばれた作品について賞金 5 万円としていましたが、2 点選出となりましたので各ロゴマーク作成者に 2.5 万円ずつを賞金としました。



<安立美奈子さんの作品>

植物・動物・昆虫などが関わり合いながら循環している様子を表現してみました。



<小澤創さんの作品>

遺伝的アプローチ、実験的アプローチ、統計的アプローチによって自然現象を解明するイメージをデザインしました。

C. 審議事項

1. 2006 年度予算案について

2006 年度予算案が決議された。

収 入 の 部			支 出 の 部		
	05 決算	06 予算		05 決算	06 予算
会費			会誌発行費	27,534,780	27,120,000
┌ 一般会員	31,663,156	31,800,000	┌ ER	15,853,807	17,780,000
└ 学生会員	5,730,200	5,800,000	└ 生態誌	7,871,183	6,000,000
┌ 団体会員	3,336,000	3,400,000	└ 保全誌	1,871,487	1,850,000
└ 賛助会員	40,000	0	└ ニュースレター	1,579,725	1,200,000
┌ 外国会員	396,900	200,000	└ 編集費	358,578	290,000
└ 和文誌購読	942,500	900,000	会議費	143,308	150,000
会費小計	42,108,756	42,100,000	旅費・交通費	2,708,696	2,100,000
ER 売上還元金	1,097,145	400,000	人件費	10,072,790	15,000,000
Back No. 売り上げ	73,300	100,000	地区会へ還元金	1,812,805	1,700,000
科研費・刊行助成金	8,600,000	8,600,000	大会補助	2,320,500	—
出版印税	1,131,732	300,000	大会支出	—	15,000,000
利子収入	93	380,000	INTECOL 会費	409,484	200,000
雑収入	537,903	—	業務委託費	5,136,300	—
広告代		200,000	事務費	4,131,177	4,410,500
著作権使用料		100,000	┌ 通信費	1,425,176	1,400,000
大会還元金	2,000,000	2,320,500	└ 消耗品費	394,175	100,000
大会収入	—	12,700,000	└ 雑費	671,076	400,000
ER 超過ページ代	36,000	—	└ レンタル料	481,750	470,500
前年度繰越金	30,003,904	25,917,724	└ 事務所賃貸料（電気代含む）	970,000	1,680,000
			└ 税理士事務所	189,000	360,000
			各種委員会費	938,230	1,300,000
			選挙費	462,994	0
			EAFES 費用	481,255	200,000
			事務所移転費用等	861,985	—
			固定資産取得支出	2,656,805	—
			次年度繰越金	25,917,724	25,917,224
合 計	85,588,833	93,118,224	合 計	85,588,833	93,097,724

単年度収入 55,548,929 67,200,500 単年度支出 55,208,070 67,180,500

特別会計 I (宮地基金)

収 入 の 部			支 出 の 部		
	05 決算	06 予算		05 決算	06 予算
前年度繰越金	5,894,175	5,294,258	宮地賞賞金	600,000	600,000
預金利息	83	0	次年度繰越金	5,294,258	4,694,258
合 計	5,894,258	5,294,258	合 計	5,894,258	5,294,258

2. 第56回大会(2008年)担当地区会について

第56回大会は東北地区会が担当することが決議された。

3. 会則改正について

以下の会則改正案が提案され決議された

第2章 会員

第7条 「権利」会員は次の権利をもつ。

v) 本会の会長・全国委員を選任し、またはこれらに選任されること。ただしこの権利は正会員(国外在住会員を除く)に限る

*~~====~~を除く

II. 日本生態学会第53回新潟大会の記録

日本生態学会第53回新潟大会(JES53)は、第2回東アジア生態学会連合大会(EAFES2)との同時開催で、朱鷺メッセ(新潟コンベンションセンター)を会場として2006年3月24日~3月28日に開催されました。

大会期間中に公開講演会1、企画シンポジウム2、公募シンポジウム13、フォーラム1、自由集会31、サテライト集会1、一般講演(口頭発表)188、一般講演(ポスター発表)624、が行われました(JES53プログラムのみ)。参加者は1671名(EAFES参加者を含む)でした。5日間の日程とポスター賞(日本生態学会公認表彰)受賞者は以下の通りです。

日 程

- 3月23日 エコカップ2006(親善フットサル大会)
- 3月24日 全国委員会、大会企画委員会、日本生態学会誌刊行協議会、Ecological Research刊行協議会、保全生態学研究刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会、自由集会
- 3月25日 企画シンポジウム、公募シンポジウム、フォーラム、一般講演(口頭発表)、一般講演(ポスター発表)、自由集会
- 3月26日 公開講演会、各賞授賞式、宮地賞受賞講演、日本生態学会賞受賞者挨拶、総会、懇親会
- 3月27日 企画シンポジウム、公募シンポジウム、一般講演(口頭発表)、一般講演(ポスター発表)、自由集会
- 3月28日 公募シンポジウム、一般講演(口頭発表)、自由集会

ポスター賞受賞者

植物繁殖

最優秀賞

○安元暁子・新田梢・矢原徹一(九大理・生物)
果実中絶がキスゲとハマカンゾウの生殖隔離に与える影響

優秀賞

○吉川徹朗・菊沢喜八郎(京大院・農)

種子食鳥類イカルによるニレ科エノキに対する散布前種子捕食—なぜ樹木個体間において被食の時間的パターンが異なるのか?—

優秀賞

○板垣智之(東北大院・生命科学)・木村恵(東北大院・農)・酒井聡樹(東北大院・生命科学)

オオヤマオダマキにおける花序内の機能分化:開花の遅い花の種子生産は補償的か?

優秀賞

○宮崎祐子(奈良県森技セ)・大西尚樹(森林総研・関西)・日野貴文(北大院・農)・日浦勉(北大・苫小牧研究院)

ササは一回繁殖か?—クマイザサ個体群の開花様式—

送粉・種子散布

最優秀賞

○長谷川陽一・陶山佳久・清和研二(東北大院・農)
花粉一粒ずつを対象としたDNA分析によるクリの送粉パターンの解明

優秀賞

○横井智之・藤崎憲治(京大院・農・昆虫生態)
他種が採餌した花を見分けるアカガネコハナバチの採餌行動

遷移・更新

優秀賞

○日野貴文(北大院・農)・日浦勉(北大・苫小牧研究院)

攪乱履歴と現在環境が及ぼす林床植生への影響—伐採と台風の履歴は多様性をどこまで説明できるか?—

優秀賞

○山崎実希(東北大院・農)・岩本晋(協和発酵工業)・市原優(森林総研)・清和研二(東北大院・農)
落葉広葉樹の実生の定着を阻害する *Colletotrichum* 属菌の病原性と種特異性の検証

優秀賞

○松田深雪・露崎史朗(北大・環境科学)
標高勾配に沿ったミネヤナギパッチの定着促進(facilitation)効果の変化

景観生態

最優秀賞

○三橋弘宗(兵庫県立人と自然の博物館)

川はなぜ蛇行すべきなのか?

動物繁殖

優秀賞

○鮫島由佳(東大・農)・椿宜高(国立環境研究所)
繁殖戦略としての体温調節

優秀賞

○小宮竹史(京大院・理・動物生態)
ベビーシッター選びは文脈依存?—貝に卵をあずける魚、ビワヒガイの繁殖戦略—

動物群集

優秀賞

- 三浦収（東北大・生命科学）・千葉聡（東北大・生命科学）

寄生虫の感染による宿主の表現型の変化

優秀賞

- 上野裕介（北大院・水産）・堀正和（東大院・農）・野田隆史（北大院・環境）

水域から森林への異地性流入：アオサギを介した流入の途絶が林床の生物群集に及ぼした影響

優秀賞

- 八杉公基（京大院・理）・堀道雄（京大院・理）
- オオクチバスとその被食者の形態および行動に見られる左右性

優秀賞

- 岩淵翼・占部城太郎（東北大院・生命科学研究所）
- リン制限環境下におけるミジンコ2種の成長応答：餌の質は競争に重要か？

物質循環

最優秀賞

- 石川真知子（筑波大院・環境科学）・横沢正幸（農業環境技術研究所）・白戸康人（農業環境技術研究所）・鞠子茂（筑波大院・生命環境科学）

二次遷移に伴う土壤炭素動態変化のモデルシミュレーション

最優秀賞

- 山本昭範（筑波大院・環境科学）・廣田充（国立環境研究所）・遠藤政弘（環境科学技術研究所）・鈴木静男（環境科学技術研究所）・鞠子茂（筑波大院・生命環境科学）

塩生湿地における植物の帯状構造と土壤炭素フラックスの時間変動

優秀賞

- Yoshiyuki TANAKA (Univ. Tokyo) ・ Toshihiro MIYAJIMA (Univ. Tokyo) ・ Katsumasa YAMADA (Chiba Univ.) ・ Masakazu HORI (Univ. Tokyo) ・ Natsuki HASEGAWA (Hokkaido Univ.) ・ Yu UMEZAWA (Univ. Hawaii) ・ Isao KOIKE (Univ. Tokyo)

Among-site and seasonal variability of d13C and d15N for primary producers in Akkeshi water system

優秀賞

- 菅尚子（岐阜大・流域圏センター）・内田雅己（国立極地研）・吉竹晋平（広島大院・生物圏）・神田啓史（国立極地研）・小泉博（岐阜大・流域圏センター）
- 北極ツンドラ生態系における凍結リターからのCO₂放出

優秀賞

- 喜多智（東農工大院・農）・Cahyono Agus (Gajah Mada University ・林) ・戸田浩人・生原喜久雄（東農工大院・農）
- 東カリマンタン熱帯林土壌系の微生物バイオマスと窒素・リンの関係

優秀賞

- 浦野忠朗（筑波大院・生命環境）・鞠子茂（筑波大・生物）・杉田倫明（筑波大・地球科学）・浅沼順（筑波大・地球科学）・及川武久（筑波大・生物）

モンゴル半乾燥草原における土壤炭素フラックス

優秀賞

- 小林秀樹 (JAMSTEC-FRCGC) ・ デニス-ダイ (JAMSTEC-FRCGC)

Radiative transfer simulation of three-dimensional distribution of photosynthetically active radiation of forest canopy under various atmospheric conditions

種多様性

優秀賞

- 潘宇・市野隆雄（信州大・理）
- ヤマアリの科における表面炭化水素組成の多様性

優秀賞

- 遠藤真太郎・市野隆雄（信州大・理・生物）
- 体表炭化水素とDNAによるアリーアブラムシ系の共進化の研究

数理

最優秀賞

- 鈴木清樹・佐々木顕
- 格子空間における感染の流行を防ぐための栽植パターン

保全・都市生態

最優秀賞

- 吉田康子（筑波大・生命環境）・本城正憲（東京大・環境生命）・北本尚子（筑波大・生命環境）・大澤良（筑波大・生命環境）

Qst と Fst 一量の形質と分子マーカーによる野生サクラソウ集団の遺伝的分化の把握—

優秀賞

- 兼子伸吾・井鷲裕司・中越信和（広島大院・国際協力研究科）

AFLP による絶滅危惧種ヒゴタイの野生集団および栽培集団の遺伝解析

優秀賞

- 藤原直子（豊橋市自然史博物館）・富田啓介（名古屋大・環境・地理）

どのような湿地で絶滅したか：愛知県におけるシラタマホシクサの減少

優秀賞

- 諸澤崇裕（筑波大学生物資源学類）・藤岡正博（筑波大学農技センター）

霞ヶ浦における在来4種と移入3種のタナゴ類の現状と保全

優秀賞

- 下川真季（(株)愛植物設計事務所）・上條隆志（筑波大）・岡部宏秋（(独)森林総合研究所）・阿部和時（日大）

三宅島2000年噴火被害林における火山灰除去が植生

回復に及ぼす効果

植物群落

最優秀賞

- 石田真也・紙谷智彦（新潟大・農）・中静透（地球研）
洪水による自然攪乱と焼き払いによる人為攪乱が河川高水敷の植物種組成に与える影響

優秀賞

- 安東まゆ美（北海道教育大・院）・並川寛司（北海道教育大・札幌校）
北海道黒松内町周辺のブナ林における種組成と林分構造

植物生理生態・物質生産

優秀賞

- 小口理一（東北大学・生命科学研究所）・彦坂幸毅・日浦勉・広瀬忠樹
冷温帯落葉樹林の樹木実生におけるギャップ形成後の成長速度と光順化能力の関係

優秀賞

- 中村伊都・小野田雄介・河田雅圭・彦坂幸毅（東北大院・生命科学）
CO₂ 噴出地におけるオオバコの進化：生理生態的特性

優秀賞

- 加藤正吾・山本隆史・川窪伸光・小見山章（岐阜大・応用生物学）
テイカカズラ匍匐シュートにおける正と負の光屈性

植物個体群・生活史

最優秀賞

- 鈴木智之・鈴木準一郎・可知直毅（首都大・理・生物）
稚樹バンクから一斉更新したシラビソ・オオシラビソ林の空間構造動態— mark correlation 関数を用いた解析

優秀賞

- 荒木希和子（北大院・環境科学）・島谷健一郎（統計数理研究所）・大原雅（北大院・環境科学）
Clonal 植物スズランの個体群構造とその変化パターン

優秀賞

- 山岸洋貴（北大院・環境科学）・富松裕（首都大学東京・理）・大原雅（北大院・環境科学）
オオバナノエンレイソウ集団の空間遺伝構造—集団維持プロセスの変化が空間遺伝構造に与える影響—

動物個体群

最優秀賞

- 宇津野宏樹（信州大・理・生物）・浅見崇比呂（信州大・理・生物）
発生拘束が鏡像体の進化を抑制する

優秀賞

- 嘉田修平・藤崎憲治（京大院・農・昆虫生態）
コバネナガカメムシにみられる体サイズの個体群間変異

行動・社会生態

最優秀賞

- 石川由希・三浦徹（北大・地球環境）
オオシロアリにおける兵隊の防衛行動と神経系の特殊化

最優秀賞

- 竹内勇一・堀道雄（京大院・理・動物生態）
タンガニイカ湖産エビ食魚の捕食行動における左右非対称性

優秀賞

- 平田真規・東正剛（北大院・地球環境）
単独性か真社会性か？女王とワーカーの繁殖戦略

優秀賞

- 平山寛之（九州大学）
アメンボの潜水産卵と溶存酸素

優秀賞

- 坂本信介（都立大院・理）
アカネズミ雌における neighbor-stranger discrimination: dear enemy phenomenon を示さないのは…？

優秀賞

- 土畑重人（東大院・総合文化）・辻和希（琉大・農）・嶋田正和（東大院・総合文化）
社会性昆虫アミメアリにおける利己者・利他者の個体群動態モデル

進化

最優秀賞

- 東樹宏和（九大・理）
どこで軍拡競争は加速する？：ツバキゾウムシ共進化の局所性と空間的な階層

優秀賞

- 細川貴弘（産総研・生物機能工学）・深津武馬（産総研・生物機能工学）
マルカメムシが利用できるエサ植物は腸内共生細菌によって決まる？

優秀賞

- 細将貴（京大・理・動物生態）・亀田勇一（京大・人環・自然環境動態論）・浅見崇比呂（信大・理・進化生物）・堀道雄（京大・理・動物生態）
左巻きのカタツムリは自然選択で進化した？

外来種

優秀賞

- 問田高宏・平田真規・長谷川理・東正剛（北大院・地球環境）
日本にアルゼンチンアリは何回侵入したか？

優秀賞

- 澤田佳宏（岐阜大・流域圏科学研究センター・兵庫県立人と自然の博物館）・窪田圭多（滋賀県東近江地域振興局）・津田智（岐阜大・流域圏科学研究センター）
山火事による二次林焼失地への牧草播種が植生回復に及ぼす影響

動物生活史

優秀賞

- 石川麻乃（北大・地球環境）・本郷紗希子（東大・総合文化）・三浦徹（北大・地球環境）
アブラムシの翅多型機構に関する生態発生学 II. 分散と繁殖のトレードオフ

優秀賞

- 今井真木・三浦徹（北大・地球環境）
ミジンコにおいて捕食者に誘導される表現型多型の発生制御に関する研究

優秀賞

- 加（槻木）玲美（佐賀大・有明海総合研究プロジェクト）・石田聖二（ニューヨーク州立大バッファロー・生物科学）・占部城太郎（東北大・生命科学研究科）
温暖化は *Daphnia* の生活史を変化させるか？

菌類・微生物

最優秀賞

- 船津勇一（広島大院・生物圏）・吉竹晋平（広島大院・生物圏）・藤吉正明（東海大・教養・人間環境）・中坪孝之（広島大院・生物圏）
硫気荒原土壌におけるススキ実生の成長に対するアーバスキュラー菌根の役割

分子生態

優秀賞

- 小久保望（筑波大・生命環境）・徳永幸彦・五箇公一
マルハナバチの家庭事情：マイクロサテライト DNA のハプロタイプからみたマルハナバチ野生巣内の遺伝構造

優秀賞

- 兼森雄一・竹垣毅（長大院・生産）・夏苺豊（長大・水産）
ミトコンドリア DNA 分析によるムツゴロウの遺伝的集団構造

優秀賞

- 天野百々江（神戸大院・自然科学研究科）・飯田聡子（神戸大・遺伝子実験センター）・岩崎哲史（神戸大・遺伝子実験センター）・深見泰夫（神戸大・遺伝子実験センター）・乾秀之（神戸大・遺伝子実験センター）・小菅桂子（神戸大・遺伝子実験センター）
マイクロアレイによる水生植物ヒルムシロ属の高温ストレス応答の解析

生態系管理

優秀賞

- 萩森優（広島大・総科）・佐々木晶子（産総研・中国センター）・中坪孝之（広島大・生物圏）
河口干潟における好氣的有機物分解に対する環境要因の影響：温度と潮位

優秀賞

- 一倉新之助（新潟大院・自然科学研究科）
溪畔林における岩上に生育する植物の出現を決定する要因について

優秀賞

- 藤井芳一・金子信博（横浜国大・環境情報）
シマミミズ (*Eisenia fetida*) を用いた重金属汚染土壌の酸性化に対する生態リスク評価

Ⅲ. The Second Scientific Congress of EAFES の報告

The Second Scientific Congress of EAFES (EAFES2) は、朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター）を会場として 2005 年 3 月 25 日から 28 日まで開催されました。大会期間中に Plenary Symposium 1、Symposia 14、Oral Presentation 83、Poster Presentation 160 が行われました。参加者は中国（45 人）・韓国（41 人）・日本（242 人）・他 10 カ国（15 人）の計 343 人でした。3 日間の日程とポスター賞の受賞者は以下の通りです。

3 月 25 日 Opening Ceremony, Plenary Symposium, Symposia,

3 月 26 日 Symposia, Oral Presentations, Poster Presentations, Banquet,

3 月 27 日 Symposia, Oral Presentations,

3 月 28 日 Oral Presentations, Closing Ceremony

Poster Prize Winner

- Tomomi Matsui and Takayoshi Tsuchiya
Distribution of emergent plants (*Typha latifolia* L., *Typha orientalis* Presl, *Typha angustifolia* L.) based on water depth

- Cui Xianghui, Lu Qi, Chu Jianmin
The Chinese Desert Ecosystem Long-term Observation and Research Network and Its Development

- Analuddin Kangkuso, Rempei Suwa and Akio Hagihara
Yearly changes in phytomass and crown shape of *Kandelia candel* stands from the riverside landward in Manko Wetland, Okinawa Island

- Mi-Sun Lee, Jae-Seok Lee and Hiroshi Koizumi
Temporal and spatial variability of CO₂ efflux from soil and snow surfaces in a Japanese Cedar Forest, Central Japan

- Nobuhito Ohte, Lina Koyama, Atsuko Sugimoto, Ken'ich Osaka, Miki Ueda and Trofim C. Maximov
Does larch uptake atmospheric nitrogen oxide from leaves in East Siberian taiga? : Suggestions from nitrate isotope signatures in tissue waters

- Eri Mizumachi and Akira Mori
Current-year shoots and branches structural variations within crown of *Abies mariesii* in a snowy sub-alpine thicket

- Tetsuya Shimamura, Masayuki Ito, Nobuhito Ote, Yasuhiro Takemon
Evolution of water chemistry in Mizoro-ga-ike, a pond with a floating-mat bog

IV. 書評依頼図書 (2006年1月～2006年8月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 鷺谷いづみ編「サクラソウの分子遺伝生態学」(2005) 304pp. 東京大学出版会 ISBN:4-13-066156-6
2. 鈴木邦雄著「マネジメントの生態学」(2006) 320pp. 共立出版株式会社 ISBN:4-320-05633-7
3. 湯本貴和・松田裕之編「世界遺産をシカが喰う シカと森の生態学」(2006) 216pp. 文一総合出版 ISBN:4-8299-1190-5
4. 亀山章監修「生物多様性緑化ハンドブック」(2006) 336pp. 地人書館 ISBN:4-8052-0766-3
5. 種生物学会編「森林の生態学 長期大規模研究からみえるもの」(2006) 384pp. 文一総合出版 ISBN:4-8299-1066-6
6. 酒井聡樹著「これから論文を書く若者のために」(2006) 324pp. 共立出版 ISBN:4-320-00571-6
7. 日本付着生物学会編「フジツボ類の最新学」(2006) 398pp. 恒星社厚生閣 ISBN:4-7699-1033-9
8. T. アンダーセン著・山本民次訳「水圏生態系の物質循環」(2006) 262pp. 恒星社厚生閣 ISBN:4-7699-1036-3
9. 日本海洋学会編「有明海の生態系再生をめざして」(2006) 214pp. 恒星社厚生閣 ISBN:4-7699-1023-1
10. K. Ozaki・J. Yukawa・T. Ohgushi・P. W. Price (Eds.) 「Galling Arthropods and Their Associates」(2006) 308pp. Springer ISBN:4-431-32184-5
11. T. ウェイクフォード著・遠藤圭子訳「共生という生き方」(2006) 196pp. Springer ISBN:4-431-71197-X
12. 竹中修企画・村山美穂・渡邊邦夫・竹中晃子編「遺伝子の窓から見た動物たち」(2006) 452pp. 京都大学出版会 ISBN:4-87698-682-7
13. エコソフィア編集委員会「エコソフィア 17」(2006) 128pp. 昭和堂 ISBN:4-8122-0616-2
14. 武田博清・占部城太郎編「陸域生態系の科学 地球環境と生態系」(2006) 284pp. 共立出版 (株) ISBN:4-320-05637-X
15. 鷺谷いづみ著「サクラソウの目 第2版 一繁殖と保全の生態学一」(2006) 248pp. (株) 地人書館 ISBN:4-8052-0775-2
16. 高槻成紀著「シカの生態誌」(2006) 484pp. 東京大学出版会 ISBN:4-13-060187-3
17. 大森信+ボイス・ソーンミラー著「海の生物多様性」(2006) 232pp. 築地書館 ISBN:4-8067-1339-2
18. 菊地直樹著「蘇るコウノトリ 野生復帰から地域再生へ」(2006) 266pp. 東京大学出版会 ISBN:4-13-063326-0

V. 寄贈図書

1. 「トヨタ財団 30 年史」(2006) 財団法人 トヨタ財団

2. 「第5回シンポジウム 生態環境リスクマネジメントへのアプローチ 講演要旨集」(2006) 113pp. 横浜国立大学 21世紀プログラム
3. 「第21回国際生物学賞 記録」(2005) 36pp. 独立行政法人日本学術振興会国政生物学賞委員会
4. 「第13回生態学琵琶湖賞報告書」(2005) 64pp. 滋賀県
5. 「果樹研究所研究報告第5号」(2006) 118pp. 果樹研究所
6. 「FUTAO No50, 51」(2006) 20pp. フタオ会
7. 「昆虫関連団体雑誌年鑑」(2006) 168pp. フタオ会
8. 「Progress in Information No.3」(2006) 78pp. 国立情報学研究所
9. 「SESSILE ORGANISMS 23 巻 1 号」(2006) 52pp. 日本付着生物学会
10. 「文明のクロロード Museum Kyushu 終刊号」(2006) 82pp. 博物館等建設推進九州会議

VI. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 2006年度コスモスセミナー「自然教室」集まれ昆虫好きな子供たち 2006
期間：2006年7月31日～8月2日
場所：関西学園都市・室池地区「アイ・アイ・ランド」
主催：財団法人国際花と緑の博覧会記念協会

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 第10回尾瀬賞

- ①泥炭湿原の保全に関わる基礎的研究において、優れた業績を上げ、今後の研究の深化が期待される人。研究対象は「主として泥炭を有する湿原およびそこを生活の場とする生物」とする。
- ②2名以内。1名につき賞金100万円
- ③平成18年4月1日～10月31日(当日の消印有効)
- ④財団法人尾瀬保護財団事務局「尾瀬賞」係
〒371-8570 群馬県前橋市大手町一丁目1-1
群馬県庁内
電話：027-220-4431 ファックス：027-220-4421
Eメール：info@oze-fnd.or.jp

(2) 平成19年度笹川科学研究助成

- ①人文・社会科学および自然科学(医学を除く)に関する研究。基礎研究をはじめ非戦略的な研究や地道な観察研究などを他から助成を得難い優れた研究を優先的に採り上げる。
- ②1研究計画100万円を限度とする。
- ③平成18年10月1日～平成18年10月13日(必着)
- ④財団法人日本科学協会 笹川科学研究助成係

〒 107-0052 東京都港区赤坂 1-2-2
日本財団ビル 5F
TEL.03-6229-5365 FAX.03-6229-5369
E-mail jss@silver.ocn.ne.jp
URL http://www.jss.or.jp

(3) 鹿島学術振興財団 2006 年度研究助成

- ①都市・住居環境の整備及び国土・資源の有効利用および文化的遺産・自然環境の保全等による国民生活の向上に寄与する研究。
- ②総額 4500 万円、1 件あたりの助成金は 300 万円以内
- ③ 2006 年 11 月 20 日 (月)
- ④生態学会事務局 (学会推薦が必要です)

(4) 第 14 回日産科学賞

- ①環境科学分野において、学術研究における重要な発見など学術文化の向上発展に大きな貢献をした、わが国の公的研究機関に所属する新進気鋭の研究者とする。
- ②賞金 500 万円
- ③平成 18 年 10 月 13 日 (必着)
- ④日本生態学会事務局 (学会推薦が必要です)

書 評

花里孝幸著 (2006) 「ミジンコ先生の水環境ゼミ：生態学から環境問題を視る」268pp. 地人書館. 本体価格 2,000 円. ISBN: 4-8052-0772-8

この本を読むと、「ミジンコは湖の主人公である」ということが良くわかる。筆者は、国立研究機関研究員として働き始めて以来、ミジンコを初めとする動物プランクトンの調査にいそしみ、霞ヶ浦・諏訪湖のような大きな湖から小さな実験池、さらには実験室のビーカーまで様々な場で、動物プランクトンとそれを取り巻く様々な生き物の個々の生態とお互いの関係とを、身近な問題とからめて明らかにしていくことを続けてこられた。学問分野で言えば、群集生態・生態毒性・陸水など、そしていまや環境学的探求にも携わっている。そのような履歴が研究の成果という形で本書にまとめられている。

さて、それではこの本に盛られた主題の中で、特に注目すべきものは何であろうか。1 つは、何とんでも、第 2 章 (本書での表現は、ゼミなので 2 時限) にまとめられている、動物プランクトンの種間、あるいは生態的グループ間の相互作用を具体的に明らかにしたことである。それは、人為的にある種の攪乱が与えられた時に動物プランクトン群集の構成はその相互作用を介して、ある一定の様式に従って劇的に変わっていくということである。例えば、殺虫剤を与えると、実験池のミジンコ群集は大型のカプトミジンコから、中型のオナガミジンコ、さらには小型のニセゾウミジンコへと主体が変わっていくことを筆者は明らかにした。これは、殺虫剤を与えな

い時のミジンコ相の変化と比べてみると、競争に強い大型のミジンコほど殺虫剤に弱いことを示したことになる。

面白いことに、第 5 章で淡水魚モツゴによる捕食がミジンコ群集をどのように変えるかが説明されているが、モツゴに食われやすいのは競争に強いミジンコなのである。つまり、大型のミジンコは競争に強いが、プランクトン食の魚に食われやすく、その上殺虫剤にも弱い、といえるようである。これらの実験に象徴されるような、人手による魚や化学物質の混入が湖沼で起きている。そうした環境の攪乱に大型のミジンコは影響されやすいと認識しておくのが安全であるということになる。ミジンコ群集といえども、同じような種が揃っている訳ではなく、それぞれに特徴のある、したがって環境変化に対する反応もちがうミジンコが集まっていることを示している。そして、このようなミジンコの多様さは湖の環境を管理する時に無視できないということを、第 1 章の魚が水質を変えるの節で筆者は強調している。

筆者はミジンコの「とんがり」にも関心を注いでいることが第 2 章に書かれている。ミジンコを食べるフサカ幼虫がいるとミジンコの頭が尖る現象がよく知られていた。捕食を避けるための変化である。そこへ、動物プランクトン群集研究の副産物として、殺虫剤でも頭のとがることを筆者は見つけたのである。殺虫剤だけでも、さらにフサカの匂い物質と合わせれば一層、頭が尖る。つまり、ミジンコのケミカルコミュニケーションを攪乱して、それをかたったり、増長させたりしていることになる。湖の生態系への化学物質の影響を見る上で重要な発見であるし、ケミカルコミュニケーションの仕組みを解明するためにも興味深い。

ところで、筆者はミジンコだけに関心を注いでいるわけではない。湖の中での魚の振るまいが生態系を大きく変えることにも注目している。気になる魚のひとつに、コイがある。広く湖・川から公園の池や川まで見られ、人々に親しまれているコイが、実は水質の浄化の上ではよくないことが北米などにおける研究で前から知られてはいた。湖底をかき回して、リンを水中に拡散したり、泥を巻き上げて水草を枯らすのである。第 1 章で筆者が指摘する、湖が汚れると魚が増える現象も、このようなコイの振るまいから連想される。

しかし、コイを管理するという事は難しい。養殖・放流が行われ、釣りも盛んで、広く親しまれてきたコイを各々の水域利用に見合うようにうまく生かしていくことは容易ではない。それをいかに実現していくかは、第 6 章で筆者が論じている、湖の保全と利用の方針とそれに対する合意形成の問題である。今は諏訪湖を中心にこの問題に関わっている筆者の見解を読んでみる価値はある。もちろん、筆者の提供するミジンコと湖の生態系についての話題も湖の環境の成り立ちについての理解を深めるので、問題を考える際に広い視野を与えてくれるだろう。

いずれにせよ、ミジンコとそれを取り巻く湖の生物の各々の生き様と相互関係の面白さ、またそれらの現象が紡ぎだす湖の環境とその人間社会にとっての意味が筋道

を付けて記されているので、これらの主題を学ぶためには良い副読本となるであろう。続けて著者が上梓した「ミジンコはすごい！」(岩波ジュニア新書)も、ミジンコに関する同様の主題を写真・図を豊富に用いて解説しているのも、これもあわせて参考にされることをお勧めする。

(独立行政法人国立環境研究所・生物圏環境研究領域・高村健二)

猿渡敏郎編著 (2006) 「魚類環境生態学入門—溪流から深海まで、魚と棲みかとのインターアクション」
318pp. 東海大学出版会。本体価格 3800 円。ISBN: 4-486-01729-3

本書は、溪流、田んぼ、汽水域、深海域などといった水域ごとの魚類の生態や生活史にスポットをあて、魚類と環境のかかわりを描こうとしたものである。イワナ、ヤマメ、シロギスなど我々に馴染みの深い魚から、深海魚のハダカイワシ、南極海に生息するダルマノト、アナゴの幼生(ノレソレ)など珍しい魚が登場し、各章ごとにオムニバス形式で話が展開される。

水中の生物、とくに海水魚は、生態学研究の対象として不向きと捉えられがちである。水中では実験的操作が困難であるし、そもそも生活史や生態について十分な情報が得られている魚類が少ない。その一方で、ウナギの産卵場所を太平洋のピンポイントで特定した最近の研究(Tsukamoto (2006) Nature 439(7079):929-929) など、魚類学研究には発見的な魅力がまだまだ多く含まれている。本書は、生態学の一般原理を解明する研究を紹介するものではない。編者がまえがきで記しているように、この本は「魚類環境生態学の現状を紹介した自然科学系の啓発書」であり、研究の動機にまつわるエピソードも含め、研究者が魚の生活史解明にむけて如何にアプローチし、何をどこまで明らかにしたのかを記す追究の記録である。いずれの章も、フィールドでの裏話や失敗談、新しい発見など、生活史のディテールを描こうとする著者らの思いが吐露されており、読み物としても面白い。

第I部では、身近な水域での生態として、イワナやヤマメの産卵生態、人間が創り出した生息環境の代表として田んぼの魚たち、汽水域や渚帯での研究が紹介されている。この章では、フィールド研究者が自らの足で稼いだ野外調査の記録がまとめられているが、身近な水域だけに研究者が独自に編み出した工夫も面白い。たとえば筆者の1人は、ヤマメの産卵床(川底の砂礫)の通水性が卵の生存に影響を与えるという仮説を実証するために、砂礫中に墨汁を注入し同時にセットした複数のポイントで経時的に採水していくという方法を開発し、見事にこの仮説を検証している。また別の章では、米を作るという目的に特化した田んぼを川魚たちが巧みに利用している様子が紹介されている。第II部では、海洋の生態として、内湾、サンゴ礁、深海魚のハダカイワシ、南極海の魚の生態が紹介される。ここでは、海洋環境の多様性に対応するために、調査方法もスキューバ潜水から大型の海洋調査船までさまざまである。第III部は、魚の回遊と環境というテーマで、マアナゴの回遊経路の謎に追ったスケールの大きな研究の紹介や、サケ・マス ホッチャレ(死骸)が陸上生態系に及ぼす影響を報告した文献がレビューされており、この分野での研究の動きを知ることができる。サケ・マス等の回遊魚による海洋由来の栄養分が、陸上生態系の一次・二次生産を高めているという報告がなされるなか、ホッチャレを食べるハクトウワシの体内でPCB濃度が濃縮され、親鳥の死亡率が高まるという負の影響を検出した研究も存在する。今後、魚類と陸域生態系の結びつきを調べる研究は、研究手法の妥当性も含めて、ますます活発になっていくと感ぜられる。第IV部では、高校での野外環境学習の材料としてワカサギの生活史研究が取り上げられ、水生生物の教材化、教育のあり方についての筆者の考え方が述べられている。

本書は、魚類学、水産学を専攻しようとする学生、大学院生に研究の糸口を与えるものであり、また手法のヒントが多く含まれているので水生生物の生態を研究する者にとっても実用書として役立つであろう。

(水産総合研究センター・山本祥一郎)

追悼

Ecological Research の編集委員である Shwu-Bin Horng 教授 (National Taiwan University、昆虫学教室) が、このたび癌でお亡くなりになったという知らせが参りました。Horng 先生は、とくに昆虫関係および個体群動態の論文を多数担当してくださいました。ついしばらく前まで論文のことでやり取りしていたので、本当に突然のことに驚いています。ご冥福をお祈りするとともに、会員の皆様と Horng 先生の編集委員としてのご協力に感謝したいと思います。

巖佐 庸 (Ecological Research 編集委員長)

日本生態学会役員一覧

会長	菊沢 喜八郎	2006.1 ~ 2007.12
次期会長	矢原 徹一	2008.1 ~ 2009.12
全国委員		
全国区	巖佐 庸	2006.1 ~ 2007.12
	粕谷 英一	2006.1 ~ 2007.12
	工藤 岳	2006.1 ~ 2007.12
	酒井 聡樹	2006.1 ~ 2007.12
	柴田 銃江	2006.1 ~ 2007.12
	嶋田 正和	2006.1 ~ 2007.12
	杉本 敦子	2006.1 ~ 2007.12
	竹中 明夫	2006.1 ~ 2007.12
	中静 透	2006.1 ~ 2007.12
	中根 周歩	2006.1 ~ 2007.12
	日浦 勉	2006.1 ~ 2007.12
	東 正剛	2006.1 ~ 2007.12
	松田 裕之	2006.1 ~ 2007.12
	矢原 徹一	2006.1 ~ 2007.12
	山本 智子	2006.1 ~ 2007.12
地方区	野田 隆史(北海)	2006.1 ~ 2007.12
	占部城太郎(東北)	2006.1 ~ 2007.12
	小池 文人(関東)	2006.1 ~ 2007.12
	山本 進一(中部)	2006.1 ~ 2007.12
	曾田 貞滋(近畿)	2006.1 ~ 2007.12
	波田 善夫(中四)	2006.1 ~ 2007.12
	伊澤 雅子(九州)	2006.1 ~ 2007.12
常任委員		
	石川 真一	2006.1 ~ 2007.12
	齊藤 隆	2006.1 ~ 2007.12
	中静 透	2006.1 ~ 2007.12
	長谷川 眞理子	2006.1 ~ 2007.12
	山本 智子	2006.1 ~ 2007.12
	松田 裕之	2006.6 ~ 2007.12
幹事長	小泉 博	2006.1 ~ 2008.12
庶務幹事	津田 智	2006.1 ~ 2008.12
会計幹事	肥後 睦輝	2006.1 ~ 2008.12
会計監事	石原 道博	2005.1 ~ 2007.12
	徳地 直子	2006.1 ~ 2008.12
Ecological Research 編集委員会		
編集委員長	巖佐 庸	2005.1 ~ 2007.12
編集幹事	矢原 徹一	2005.1 ~ 2007.12
	津田 みどり	2005.1 ~ 2007.12
	井鷲 裕司	2005.1 ~ 2007.12
編集委員	高橋 耕一	2003.7 ~ 2007.12
	中野 伸一	2003.7 ~ 2007.12
	玉置 昭夫	2003.7 ~ 2007.12
	伊東 明	2003.9 ~ 2007.12
	梶本 卓也	2003.9 ~ 2007.12

関島 恒夫	2004.4 ~ 2007.12	
市岡 孝朗	2004.4 ~ 2007.12	
島田 卓哉	2004.4 ~ 2007.12	
陶山 佳久	2004.4 ~ 2007.12	
榎木 勉	2004.4 ~ 2007.12	
佐藤 一憲	2004.4 ~ 2007.12	
谷内 茂雄	2004.4 ~ 2007.12	
谷口 義則	2004.4 ~ 2007.12	
杉本 敦子	2005.1 ~ 2007.12	
高村 典子	2005.1 ~ 2007.12	
柴田 銃江	2005.1 ~ 2007.12	
酒井 章子	2005.1 ~ 2007.12	
久米 篤	2005.9 ~ 2007.12	
鎌田 磨人	2005.9 ~ 2007.12	
鈴木 準一郎	2005.9 ~ 2007.12	
彦坂 幸毅	2005.9 ~ 2007.12	
金子 信博	2005.9 ~ 2007.12	
原 正利	2005.9 ~ 2007.12	
江口 和洋	2005.9 ~ 2007.12	
Michael Boots	2005.1 ~ 2007.12	
Barray W. Brook	2005.1 ~ 2007.12	
Jae Chun Choe	2005.1 ~ 2007.12	
Tae-Soo Chon	2005.1 ~ 2007.12	
Richard T. Corlett	2005.1 ~ 2007.12	
Franck Courchamp	2005.1 ~ 2007.12	
Tom J. de Jong	2005.1 ~ 2007.12	
Raghavendra Gadagkar	2005.1 ~ 2007.12	
Upali Nimal Gunatilleke	2005.1 ~ 2007.12	
Sun-Kee Hong	2005.1 ~ 2007.12	
Shwu-Bin Horng	2005.1 ~ 2007.12	
Mark O. Johnston	2005.1 ~ 2007.12	
Chul-hwan Koh	2005.1 ~ 2007.12	
Simon A. Levin	2005.1 ~ 2007.12	
Michael A. McCarthy	2005.1 ~ 2007.12	
Helene C. Muller-Landau	2005.1 ~ 2007.12	
Navjot Singh Sodhi	2005.1 ~ 2007.12	
Simon Thrush	2005.1 ~ 2007.12	
Claus Wedekind	2005.1 ~ 2007.12	
Hoi Sen Youg	2005.1 ~ 2007.12	
Hung Tuck Chan	2005.1 ~ 2007.12	
Min Cao	2005.1 ~ 2007.12	
Ping Xie	2005.1 ~ 2007.12	
日本生態学会誌編集委員会		
編集委員長	大串 隆之	2005.1 ~ 2007.12
編集幹事	山内 淳	2005.1 ~ 2007.12
	陀安 一郎	2005.1 ~ 2007.12
	酒井 章子	2005.1 ~ 2007.12
編集委員	齊藤 隆	2005.1 ~ 2007.12
	近藤 倫生	2005.1 ~ 2007.12

佐竹	暁子	2005.1 ~ 2007.12
津田	みどり	2005.1 ~ 2007.12
畑田	彩	2005.1 ~ 2007.12
広瀬	祐司	2005.1 ~ 2007.12
西田	隆義	2005.1 ~ 2007.12
島野	光司	2005.1 ~ 2007.12
鈴木	英治	2005.1 ~ 2007.12
日浦	勉	2005.1 ~ 2007.12
鎌田	直人	2005.1 ~ 2007.12
酒井	聡樹	2005.1 ~ 2007.12
中丸	麻由子	2005.1 ~ 2007.12
三浦	徹	2005.1 ~ 2007.12
鷺谷	いづみ	2005.1 ~ 2007.12
野田	隆史	2005.1 ~ 2007.12
工藤	岳	2005.1 ~ 2007.12
井鷲	裕司	2005.1 ~ 2007.12
奥田	昇	2005.1 ~ 2007.12
市岡	孝朗	2005.1 ~ 2007.12
宮竹	貴久	2005.1 ~ 2007.12
工藤	洋	2005.1 ~ 2007.12
安井	行雄	2005.1 ~ 2007.12
古賀	庸憲	2005.1 ~ 2007.12
辻	和希	2005.1 ~ 2007.12
彦坂	幸毅	2005.1 ~ 2007.12

保全生態学研究編集委員会

編集委員長	湯本 貴和	2006.4 ~ 2009.3
編集幹事	椿 宜高	2006.4 ~ 2009.3
	西廣 淳	2006.4 ~ 2009.3
編集委員	石井 実	2006.4 ~ 2009.3
	井上 幹生	2006.4 ~ 2009.3
	梅原 徹	2006.4 ~ 2009.3
	加藤 真	2006.4 ~ 2009.3
	角野 康郎	2006.4 ~ 2009.3
	倉本 宣	2006.4 ~ 2009.3
	小池 裕子	2006.4 ~ 2009.3
	小池 文人	2006.4 ~ 2009.3
	柴田 昌三	2006.4 ~ 2009.3
	高槻 成紀	2006.4 ~ 2009.3
	高村 典子	2006.4 ~ 2009.3
	館野 正樹	2006.4 ~ 2009.3
	田中 哲夫	2006.4 ~ 2009.3
	中越 信和	2006.4 ~ 2009.3
	中丸 麻由子	2006.4 ~ 2009.3
	長谷川 雅美	2006.4 ~ 2009.3
	長谷川 真理子	2006.4 ~ 2009.3
	早矢仕 有子	2006.4 ~ 2009.3
	藤岡 正博	2006.4 ~ 2009.3
	堀 良通	2006.4 ~ 2009.3
	増田 理子	2006.4 ~ 2009.3
	松田 裕之	2006.4 ~ 2009.3
	安田 雅俊	2006.4 ~ 2009.3
	山本 智子	2006.4 ~ 2009.3
	鷺谷 いづみ	2006.4 ~ 2009.3

自然保護専門委員会

委員長	立川 賢一	：海洋	2006.3 ~ 2008.3
副委員長	佐藤 謙	：北海	2006.3 ~ 2008.3
幹事	清水 善和	：島嶼	2006.3 ~ 2008.3
地区委員	紺野 康夫	：北海	2006.3 ~ 2008.3
	竹原 明秀	：東北	2006.3 ~ 2008.3
	鈴木 孝男	：東北	2006.3 ~ 2008.3
	加藤 和弘	：関東	2006.3 ~ 2008.3
	上条 隆志	：関東	2006.3 ~ 2008.3
	和田 直也	：中部	2006.3 ~ 2008.3
	井田 秀行	：中部	2006.3 ~ 2008.3
	河野 昭一	：近畿	2006.3 ~ 2008.3
	和田 恵次	：近畿	2006.3 ~ 2008.3
	安溪 遊地	：中四	2006.3 ~ 2008.3
	鎌田 磨人	：中四	2006.3 ~ 2008.3
	逸見 泰久	：九州	2006.3 ~ 2008.3
	伊澤 雅子	：九州	2006.3 ~ 2008.3
	鈴木 信彦	：九州	2006.3 ~ 2008.3
専門別委員	増沢 武弘	：高山・亜高山	2006.3 ~ 2008.3
	竹門 康弘	：陸水	2006.3 ~ 2008.3
	久保田 康裕	：熱帯・亜熱帯	2006.3 ~ 2008.3
	井鷲 裕司	：遺伝子	2006.3 ~ 2008.3
	横畑 泰志	：寄生物	2006.3 ~ 2008.3
	戸塚 績	：酸性雨	2006.3 ~ 2008.3
	村上 興正	：環境行政・外来種問題	2006.3 ~ 2008.3
	矢原 徹一	：IUCN	2006.3 ~ 2008.3
	三浦 慎吾	：鳥獣管理	2006.3 ~ 2008.3

将来計画専門委員会

委員長	可知 直毅	2005.3 ~ 2007.3
副委員長	粕谷 英一	2005.3 ~ 2007.3
	巖佐 庸	2005.3 ~ 2007.3
	大橋 一晴	2005.3 ~ 2007.3
	酒井 聡樹	2005.3 ~ 2007.3
	酒井 章子	2005.3 ~ 2007.3
	下田 路子	2005.3 ~ 2007.3
	鈴木 邦雄	2005.3 ~ 2007.3
	辻 和希	2005.3 ~ 2007.3
	野田 隆史	2005.3 ~ 2007.3
	花里 孝幸	2005.3 ~ 2007.3
	安井 行雄	2005.3 ~ 2007.3
	山内 淳	2005.3 ~ 2007.3
	湯本 貴和	2005.3 ~ 2007.3
常任オブザーバー	小泉 博	2006.1 ~ 2007.3
	松本 忠夫	2005.3 ~ 2007.3

生態学教育専門委員会

委員長	山村 靖夫	2006.3 ~ 2008.3
	木村和喜夫	2006.3 ~ 2008.3
	嶋田 正和	2006.3 ~ 2008.3
	西脇 亜也	2006.3 ~ 2008.3
	林 浩二	2006.3 ~ 2008.3
	広瀬 祐司	2006.3 ~ 2008.3
	久保田康裕	2006.3 ~ 2008.3
	中村 雅彦	2006.3 ~ 2008.3
	山路 恵子	2006.3 ~ 2008.3

大規模長期生態学専門委員会

委員長	日浦 勉	2006.3 ~ 2008.3
	占部城太郎	2006.3 ~ 2008.3
	大手 信人	2006.3 ~ 2008.3
	甲山 隆司	2006.3 ~ 2008.3
	佐竹 暁子	2006.3 ~ 2008.3
	鈴木準一郎	2006.3 ~ 2008.3
	仲岡 雅裕	2006.3 ~ 2008.3
	中静 透	2006.3 ~ 2008.3
	中村 誠宏	2006.3 ~ 2008.3
	三枝 信子	2006.3 ~ 2008.3

生態系管理専門委員会

委員長	矢原 徹一	2005.4 ~ 2007.3
	村上 興正：自然保護	2005.4 ~ 2007.3
	中越 信和：景観生態	2005.4 ~ 2007.3
	中根 周歩：森林	2005.4 ~ 2007.3
	田村 典子：森林	2005.4 ~ 2007.3
	鎌田 磨人：森林・河川	2005.4 ~ 2007.3
	津田 智：草原	2005.4 ~ 2007.3
	高村 典子：湖沼	2005.4 ~ 2007.3
	西廣 淳：湖沼	2005.4 ~ 2007.3
	角野 康郎：湖沼・水田	2005.4 ~ 2007.3
	日鷹 一雅：水田・農耕地	2005.4 ~ 2007.3
	波田 善夫：湿地	2005.4 ~ 2007.3
	神田 房行：湿地	2005.4 ~ 2007.3
	加藤 真：渚・生物間相互作用	2005.4 ~ 2007.3
	国井 秀伸：汽水・河口	2005.4 ~ 2007.3
	佐藤 利幸：高山	2005.4 ~ 2007.3
	竹門 康弘：河川	2005.4 ~ 2007.3
	中村 太士：河川	2005.4 ~ 2007.3
	立川 賢一：海洋	2005.4 ~ 2007.3
	向井 宏：海洋	2005.4 ~ 2007.3
	椿 宜高：個体群	2005.4 ~ 2007.3
	松田 裕之：管理モデル	

2005.4 ~ 2007.3

嶋田 正和：管理モデル

2005.4 ~ 2007.3

長谷川眞理子：科学技術政策

2005.4 ~ 2007.3

塩坂 比奈子：普及

2005.4 ~ 2007.3

公開講演会委員会

委員長	石原 道博
	大原 雅
	紙谷 智彦

日本生態学会賞及び宮地賞選考委員会

	粕谷 英一	2005.9 ~ 2006.12
	工藤 岳	2005.9 ~ 2006.12
	東 正剛	2005.9 ~ 2006.12

論文賞選考委員会

(任期は Ecological Research 編集委員会と同じ)

委員長	巖佐 庸
	小泉 博

Ecological Research 編集委員

学術会議担当

松本 忠夫

大会企画委員会

委員長	難波 利幸	2005.1 ~ 2007.12
副委員長	竹中 明夫	2005.1 ~ 2007.12
	石濱 史子	2005.1 ~ 2007.12
	石原 道博	2005.1 ~ 2007.12
	占部 城太郎	2005.1 ~ 2007.12
	紙谷 智彦	2005.1 ~ 2007.12
	神田 房行	2005.1 ~ 2007.12
	工藤 慎一	2005.1 ~ 2007.12
	齊藤 隆	2005.1 ~ 2007.12
	夏原 由博	2005.1 ~ 2007.12
	津田 智	2005.1 ~ 2007.12
	中静 透	2005.1 ~ 2007.12
	村岡 裕由	2006.1 ~ 2008.12
	箕口 秀夫	2006.1 ~ 2008.12
	関島 恒夫	2006.1 ~ 2008.12
	佐竹 暁子	2006.1 ~ 2008.12
	坂田 宏志	2006.1 ~ 2008.12
	陀安 一郎	2006.1 ~ 2008.12
	上條 隆志	2006.1 ~ 2008.12
	久米 篤	2006.1 ~ 2008.12
	大森 浩二	2006.1 ~ 2008.12

国際対応委員会

委員長	中静 透	2005.1 ~ 2007.12
	大沢 雅彦	2005.1 ~ 2007.12
	大園 享司	2005.1 ~ 2007.12

北山	兼弘	2005.1 ~ 2007.12
杉本	敦子	2005.1 ~ 2007.12
小泉	博	2005.1 ~ 2007.12

野外安全管理委員会

委員長

粕谷	英一	2005.1 ~ 2007.12
大館	智志	2005.1 ~ 2007.12
鈴木	準一郎	2005.1 ~ 2007.12
戸田	正憲	2005.1 ~ 2007.12
森広	信子	2005.1 ~ 2007.12
山下	直子	2005.1 ~ 2007.12
湯本	貴和	2005.1 ~ 2007.12
関野	樹	2006.4 ~ 2008.12
仲岡	雅裕	2006.4 ~ 2008.12
本間	航介	2006.4 ~ 2008.12



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 大串 隆之

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2006 (平成18) 年度センター活動予定

生態学研究センターにおける2006年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

1. 共同研究

2002年度から始まった21世紀COEプログラム「生物多様性研究の統合のための拠点形成」(研究代表者: 佐藤矩行)(文部科学省研究拠点形成費補助金)や、2001年12月から継続している「植物の害虫に対する誘導防衛の制御機構」(研究代表者: 高林純示)(科学技術振興事業団・戦略的基礎研究推進事業[CREST])、2003年10月からスタートした「各種安定同位体比に基づく流域生態系の健全性/持続可能性指標の構築」(研究代表者: 永田 俊)(科学技術振興機構・戦略的創造研究推進事業[CREST])などの大型共同研究が進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員(Guest Scientist)を公募する。

3. 公募型共同利用事業

2006年度公募型共同利用事業として、分野間の交流や若手研究者の育成の観点から、以下の1件の研究会、

4件の野外実習が採択された。開催の日程などの詳細は、センターホームページに掲載する。

〈研究会〉

1) 代表者: 大串隆之・西田貴明(生態学研究センター)
「2006年度菌学若手の会の研究集会」

開催予定日: 2006年9月16日~9月17日

開催予定地: 筑波大学菅平高原実験センター

〈野外実習〉

1) 代表者: 奥田 昇(生態学研究センター)
「河川生態系の環境構造と生物群集に関する基礎実習」

開催予定日: 2006年7月29日~8月5日

開催予定地: 京都大学理学部木曾生物学研究所

2) 代表者: 陀安一郎(生態学研究センター)
「安定同位体実習」

開催予定日: 2006年8月28日~9月1日

開催予定地: 京都大学生態学研究センター

3) 代表者: 土屋和三(龍谷大学里山学・地域共生学オープンリサーチセンター)
「里山の生物多様性・人と里山との関わり」

開催予定日：2006年9月4日～9月8日

開催予定地：龍谷大学瀬田学舎「龍谷の森」、生態学研究センター「CERの森」、立命館大学びわこ・くさつキャンパス「BKC湿地」

4) 代表者：島野智之（宮城教育大学環境教育実践研究センター）

「陸上生態系における土壌ダニ類の野外調査法および分類法の習得」

開催予定日：2006年9月18日～9月22日

開催予定地：横浜国立大学

4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度（第三金曜日）センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京大生態学研究センター第二講義室（会場への道順は、センターのホームページ参照）の予定である。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に3回（7月、11月、3月）発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. 共同利用施設

大型分析機器：DNA関係ではDNAシーケンサー、全自動蛋白質一次構造分析装置、微量蛋白質精製分取

装置、蛍光分光光度計、液体クロマトグラフ-アミノ酸分析計、自記分光光度計、超遠心機など、安定同位体関係ではガスクロ燃焼装置付質量分析計および水同位体比分析用自動前処理装置（MAT252）、元素分析計付質量分析計（コンフロ、delta S）が稼働している。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。

シンバイオトロン：テラトロン、ズートロン、アクアトロンからなるシンバイオトロンが運転されている。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林、林木群集実験植物園、CERの森があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に担当者に連絡してください。

DNAシーケンサー等関係：清水

安定同位体関係：陀安

観測船関係：永田

シンバイオトロン関係：奥田

実験圃場林園関係：椿

7. 協議委員会、運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

センター員の異動

- ・ 椿 宜高氏が、4月1日付けで独立行政法人 国立環境研究所より生態学研究センターの教授として着任されました。
- ・ 吉山浩平氏が、4月30日付けで生態学研究センター COE 研究員を退職されました。
- ・ 片山 昇氏が、5月1日付けで生態学研究センター COE 研究員に赴任されました。